の時の日蓮の態度はどうであつたか、伊豆の伊東俎岩の上に置去られて、將に潮滿ちなば海底の藻屑と消えんとする瞬間でも、日蓮のその時の態度はどうであつたか、日蓮が驕つて言ふか正義に生きて居るかと云ふことは、已に試驗されて居る事である、實際やつた事である。

宗教の固陋を忌む

且つ日蓮聖人は言ふに、宗教は固陋であつてはいけない、古い型ばかりではいけない、無闇に今のやうに突飛でもいけないけれども、併し死んだ化石の宗教ではいけない。

時機相違を誡む

正法は一字一句なれども、時機に叶ひぬれば、必ず得道成るべし。千經萬論を習學すれども、時機に相違すれば、叶ふべからず。

澤山書物を讀んでも、それが徹が生へて、化石して役に立たぬやうになつたものは何にもならぬ、今の日本佛教の學者と云ふものは、多くは千經萬論も讀まぬけれども、五十論か百論讀むと雖も、時機を知らぬから何にもならぬ、今の時代に於て佛教が戰ふには、何を目的にして戰ふか、佛教徒自ら却つて險惡なる思想、世の毒思想に味方するかの如く見えるのは甚だ怪しからぬ、現實の世の中に對する思想の戰に對して、その旗色は何處にあるか分らぬてはないか、日本の宗教家として釋迦如來の教を奉ずる者が、西洋の惡思想が襲うた時分に、どう云ふ勳功を思想界の爲に立てる積りであるか、何にも考へないでは、千經萬論を習學すると雖も何の甲斐もない、日蓮が言ふのは其處である。又日蓮主義者もさうである、毎日々々唯だ澤山の書物を讀むとか、お題目を唱へる——お題目を唱へる事も宜いけれども——唯だ譯の分らぬ事ばかり言つて居つては、日蓮主義者は駄目である、實際に效果のある働きをしなければならぬ、その事を此處にしつかり告げられたのであります。

懶惰懈怠を誡む

それから殊にノラクラを攻擊せられた、是は精神のノラクラである、懶け者位いけないものはない、一切の罪惡の基はノラクラである、ノラクラから泥棒も親

不孝も出來る、ノラクラが一切罪惡を起すのである、日蓮はノラクラが一番嫌ひだ、ノラクラは佛敵が生れ代つて來て居るのである、坊主でノラクラな懶け者は佛敎を滅ぼすべき惡魔が、即ち坊主に化けて衣を着て居るので、油斷のならぬ奴はノラクラ坊主だと云ふ、お釋迦樣にやられた惡魔外道が、印度に於て釋尊の折伏に出遇つて殘念だと云ふ怨靈が、生れ代つた奴が日本で衣を着て居るノラクラ坊主だと云ふ、えらい事を書いて居られる。

折伏を嘲るの失

烏鵲、鸞鳳を笑ふの類

それから日蓮聖人の議論は餘り强過ぎるから、そんな强い事は言はずに、少し柔らかにやりたいと云ふやうな事を云ふのは、それは最も憎むべき奴だと云ふことを、日蓮聖人は書かれた、それは斯う云ふやうに書いてある。

日蓮御房は師匠にてはおはせども餘りに剛はし、我等は柔らかに法華經を弘むべしと云はんは、螢火が日月をわらひ、蟻塚が華山を下し、井江が河海をあなづり、烏鵲が鸞鳳をわらふなるべし。

惡思想の撰滅

と云ふ、日蓮は何も考へずに盲目滅法に强い事を言ふのではない、强かるべき所に强く、優しかるべき所に於て優しくする。思想の戰は生はんぢやくはいけない、人心を襲う毒思想を撰滅する爲に、最も峻嚴なる筆誅を加へんければならぬから、日蓮が言つて居るのである、何も狹い料見で言ふのでない。今の日本人に對しても、公平を裝ひ、寛容を裝うて生ぬるい宜い加減の事を言うて居るのが、それが抑々毒になるのである、宜い加減の事ばかり言ふ者が天下に滿ちたから、今日日本人の思想が、適從する所を知らない。モッと鮮明にモッと大膽に、汝等の向ふ所は斯くあるべしと云ふことを告げなければならぬ。であるから日蓮聖人は乃公は考へて言ひ居るのであるから、『餘りに剛い、モウ少し柔かに』と云ふやうな奴は、螢が日月の光を嗤ふやうなもので、不都合千萬な奴だと言はれた。洵に好い敎訓をこの佐渡が島から弟子信者に對してお送りになつたので、今も日蓮聖人の弟子信者としては、この佐渡御書を味ふべきであります。遺文錄の八三〇頁

前後に出て居りますから、能くお讀みになる事が必要であります。

一の谷への移住

四月七日に至つて、今まで塚原三昧堂に御坐つたのが段々歸依する者もあり、旁々して愈々一の谷と云ふ所へ御移りになりました。是からは少し御樂になつたのでありまして、村役人の次郎と云ふ者が、日蓮聖人に非常に感心しまして、俺は村役人として佐渡が島に流されて來る者を澤山扱つて居る、親を殺して流された

里正の敵服と其子の受戒

り、泥棒をしたり、惡い事をして流された者は、今まで澤山ある、又順德天皇のやうに、即ち惡逆なる者の爲に流された方もあるけれども、併し法を弘める、正しい道を弘めると云ふことの爲に、自ら戰を挑んで鎌倉の忌諱に觸れた坊さんは珍らしいことである、佐渡が島あつて以來、斯う云ふ珍らしいことに依つて流された人は無い、之を唯の泥棒や人殺で流された者と同じやうに、ワイ〳〵百姓共の言ふのは間違つて居る、斯う云ふ高僧が佐渡が島に來て居ることそ幸である、敎を乞ふべきものであると考へた、その村役人はえらいものであります。所がその息子

諸宗僧徒の反抗

が又非常にえらい者で、中興と云つて御遺文の中には屢〻あります、その村役人の子でありまして、日蓮聖人に歸服して、えらい信者になりました。所がさう云ふ風に段々一方に信者が出來るに從つて、諸宗の坊さんは反對して來ます、何故反對するかと云ふと、自分達が飯が食へなくなるから反對する、日蓮のやうな者が永く居つた日には、吾々の口が乾あがると云ふ、あんな者を佐渡が島のこの狹い所に置いて貰つては困る、廣い所ならば何とか仕樣がある、けれどもこんな所へあゝ云ふ暴れ者を置いて、今日は誰が弟子になつた、昨日は誰が信者になつたと云ふやうなことで、天台の學者最蓮房も弟子になつた、村役人の次郎は信者になつた、その息子の中興も信者になつた、地頭重連も日蓮に歸服して居る、こんな有樣で行つた日には、吾々は口が乾あがつてしまう、是は日蓮を殺すなり何なりするか、さもなければ鎌倉に連れて歸つて貰つた方が宜い、こんな者を置いて貰つては困ると云ふので、ワイ〳〵と中々の騷ぎである。その光景も聖人が御遺

文の中に書いて居られまするが、その惡口は『日蓮は何時も高い山に登つて、さうして呪ひをして居る、此處等の役人共は一番にクタバルやうに、さうして日本の國が顚覆へてしまうやうに』と言つて餘程惡いことを呪咀して居ると云ふことを訴へた。それは朝直と云ふ者が、何かの役をして居つて重連の名代見たやうになつて居つた、それに訴へた、所が朝直は之を肯かない、マア能く調べて見やうと云ふやうなことで終りました。

最蓮房御書の要旨

又この四月三十日に最蓮房に與へられた最蓮房御書と云ふものがあります。是は非常に愉快なことで、佐渡が島に流された人は辛いと思ふだらうけれども、日蓮はチツとも弱つて居らぬと云ふことを、ありの儘に書いたものであります。日蓮聖人の言葉で言へば、今日蓮は流人即ち流され人であるけれども、身も心も共に嬉しく候なり、それは法華經の有難い教の事を考へ、教の爲に流されて居ると云ふことを考へれば、少しも辛いと思はぬ、辛いと思へば時間の經つのが遲く思はれるけれども、日蓮が佐渡が島に流されてよりこの四月に至つて、モウ早や半年以上になるけれども、何時經つたか分らぬ、モウ半年經つたかと思ふやうである、恰度涌出品の時に、五十小劫と云ふ長い間、時間が經つて居るのを、弟子達が半日のやうに思つたと云ふ喜びのことが說いてあるが、それと同じやうに日蓮は流されて半年早や經つたかと思ふ位である、世界には流された者は澤山あるけれども、日蓮ほど喜びに充ちた者は無からう『罪なくして配所の月を見る』と云ふ言葉はあるけれども、それでも配所に流されたら、大抵宗教を有たぬ者は、罪無くして流されたからと言つても、決して愉快のものではない、日蓮は宗教の力に生きて居るから、配所に居つても全く愉快であると言つて居る。

身心共に嬉れし

悅び身に餘まる

劫初より以來（劫初と云ふのは、世界が始つて人が住むやうになつてから、即ち世界の初めから）父母主君等の御勘氣を蒙り遠國の島に流罪せらるゝ人、我等が如く悅び身に餘りたる者よもあらじ。

島流しになつた者で、日蓮ほど悅に充ちた者は無からう、斯う考へて見れば一歩も歩まないで日蓮は佐渡が島雪の中に居りながら靈山淨土に通うて居る者である。」

靈山に往復す

一歩を行かずして天竺の靈山を見、本有の寂光土へ晝夜に往復し給ふこと嬉しとも申すばかりなし。

國民修養の資料

人は塚原三昧堂と思ふだらうけれども、日蓮は淨土へ夜も晝も往つたり來たりして居る、であるからその喜びと云ふものは、言ふべからざるものだと言はれた。實に善いことであります、日本人は之を皆修養の基としなければなりませぬ。是から日本人がやつて行くには、形の方から見れば冷たい雪の中にも立たなければならぬ、生活狀態から言へば或る時には不自由も甘んじなければならぬ、併し精神は『身心ともに嬉しく候、悅び身に餘りたる者はよもあらじ』と云ふこの精神力に依つて立つて行かなければならぬのであります。今頃の國民のやうに唯だ喜びを物質に求めて、其處に酒がなければ詰らぬ、御馳走がなければ詰らぬと云ふやうなことになつたならば、雪の中で酒が無いと云ふ時には、青菜に鹽見たやうになつてしまう、酒ばかり飲んで威張つて居るほど見つともないことはない、『腹が減つても餓ふない』その時に眞實口で言ふばかりでなく、腹が減つて目がトロンとして居る時に、心の光があつて勇氣が滿ちて居る、茲に初めて人間の價値と云ふものがあるのである。弱るべき時に弱るならば何でもない、當り前である、腹が空いたから弱つたと云ふのでは、何等修養もなければ精神力もない、人間の精神と云ふものは、日蓮聖人のやうに、流されて居るけれども『悅び身に餘る者はよもあらじ』と云ふ、其處に面白い所があるのであります。併し是は餘り上等過ぎるからこの儘でいけないならば、少しは水を差しても宜い、この儘では少し强過ぎるかも知れぬ。

取要鈔と三大祕法

次いで五月の二十四日には法華取要鈔と云ふ有名な御書が出來た、是は三大祕法のことを初めてお書きになつたので、本尊と戒壇と題目の名前が此處に現はれ

て參つたのであります。

婦人信徒の佐渡訪問

それからこの月に有名な乙御前の母が、婦人でありながら日蓮聖人を佐渡が島に訪はれたのであります。前には四條金吾の使が來て、聖人の安否を訪はれたけれども、自ら渡る人はなかつたのであります、それを婦人の身でありながら、自ら佐渡が島に日蓮聖人を訪ねた、實に是は法華行者の婦人の手本である、又斯の如き婦人を法華行者の先輩に持つて居ると云ふことは、婦人の誇りである。佐渡が島に日蓮聖人を訪ねて行つたその光景と云ふものは、『志丈夫に勝れり』と日蓮聖人は言はれて居る、鎌倉に澤山の信者もあつたけれども、日蓮聖人の佐渡が島の配所を訪ねて來る者はない、その中に一婦人の身を以て小さい子供を抱へて佐渡が島に來て、日蓮聖人がどう云ふ生活をして御坐るか見屆けなければ氣が濟まぬ、定めし御不自由であらうと精神籠めて行くのであります。その行くにも今のやうに便利な譯ではない、日蓮聖人の文章を見れば、（日妙上人御書遺文錄八六四）餘り感心な女であるから、お前は女であるけれども『上人號』と云ふものを贈らうと言つて、日妙上人と云ふ號を贈られた。上人と云ふことは、餘程えらい坊さんでなければ言はないのでありますけれども、日妙上人と云ふ號をこの婦人に贈られた、出家して居るのでもなければ、尼になつたのでもない。何事でも精神を以て世に立たなければならぬ、汝のやうな婦人は假令山を戴いて大海を渡る人はあつても、お前ほどの精神を有つた者は、世に見ることは出來ない、砂を蒸籠に入れて蒸して、それが御飯に變ることがあつても、末代の婦人としてお前のやうな者を見ることは難かしいと言はれた、であるから日妙上人の號を與へられたのであります。殊に佐渡が島にあなたが來られる道行を考へたならば、實に大變なことである、相州鎌倉より北國佐渡の國、その間は非常な長い道であつて、山もあり海もあり遙かに隔てゝ居る、山は峨々として聳え、海は濤々として横たはつて居る、風雨時に從ふことなく、山賊海賊が充滿して居つて、宿々の泊りに就けても定めし婦人の

上人號の賞賜

佐渡訪問の艱難

身として御困難であつたらう、越後邊りの人間の心は『民の心虎の如く、犬の如し』で獸のやうな奴が居る、現身に三惡道の苦みを經るやうな辛苦を舐めて、然もそれを恐れともせず、法華行者を佐渡が島に訪ねられたと云ふことは、如何にも感謝に堪へないと言つて、日蓮聖人はこの乙御前の母親を褒められた。

この日妙といふ婦人は、一說に熱原甚四郎の娘であると云ふ、甚四郎は日蓮聖人が身延へ御隱棲の日に信者となつたので、この人は多くの子女を有つて居つた、その長男は富士の山麓の眞言宗瀧泉寺の學頭であつたが、遂に聖人に歸伏して弟子となり名を日辯といふ、日辯の弟も亦聖人の弟子となり日忍といふ、又三浦氏へ嫁した甚四郎の娘の子も聖人の弟子となつて天目といふ、この三人は皆中老僧に列したのである。又日妙の長子は六老僧の日頂上人であり、次男も聖人の弟子となり寂仙房日證と云つて、駿州重須に庵を結んで終身先考の墓を守り、其處へ母日妙を迎へ、後に又妹の乙御前も母を逐ふて行つて、遂に尼となり、名を妙國

乙御前の精舍建立

尼と云つた、今私が居る妙國寺と云ふのは、この乙御前即ち妙國尼が建てた寺であります、表面天目上人が開基と云ふことになつて居るが、天目上人と乙御前とは從兄妹の間柄であつて、實はこの妙國尼が建てたのを、天目上人を迎へて開山にしたので、實際建てたのは乙御前の妙國尼でありますから、そこで妙國寺と云ふのであります。今日の婦人は學問も出來、何も出來るけれども、併し中々これだけの人は無い、この婦人が佐渡が島に訪ねて行くと云ふことは、今の文明から云つたならば大變な事に相當するのである、佐渡が島は今日の交通發達の時代から言つたら、或は濠洲に流されたと云ふか、或は露西亞の端の方に幽囚されて居るのも同じことである、それを一婦人の身で日本海を浦潮へ渡り、西比利亞の曠原を横切つて、さうして山賊海賊の跋扈する中を行くやうなものであつて、中々彼の時分に佐渡へ一婦人が行くと云ふことは容易な事ではない、無論懷劍を懷中にして、一つ間違へば死ぬと云ふ覺悟で行く、是も即ち日蓮聖人に導かれた精神の

當時の佐渡行

祈禱經とその送狀

力である。

翌文永十年、日蓮聖人御歳五十二歳、この年又最蓮房に對して、祈禱經と云ふものと送狀と云ふものを送られた。是は祈禱する坊さんが卷物に入れて持つて居るけれども、あれはその意味が違つて來て居るのであつて、この祈禱經を送られた趣意は、祈禱經と云ふものは廣宣流布を祈るのである、病人を治すとか、狐着を落すとか云ふのとは違ふ、法華經の正義を主張する上に於ての祈禱經であるから、この祈禱經を送つた副狀と云ふものには、布敎する精神の無い者には之れを渡してならぬと云ふことが書いてある、有名なことでありますが、最蓮房祈禱經送狀と云ふものには、その事がハッキリ書いてある。今の祈禱坊さんなんと云ふものは無學だから何にも構はぬでやるけれども、ちやんと御遺文に左の通り書いてある。

但し此の書は弘通の志有らん人に取つての事なり。此の經の行者なればと

現今中山驗者の消息

て器用に能はざる者には、左右なく之を授與すべからず。

この祈禱經と云ふものは、詰り行者の精神を慰める爲に書いたもので、その中はどう云ふ風に書いてあるかと云うと、法華の行者が迫害に値つたり島流しに遇つても、之を讀めば道に活きる精神が湧出ると云ふことが書いてある。即ち正義に生き、道に活きる精神を書いたものであるから、弘通の志ある者でなければ渡してならぬと云ふ。『弘通』と云ふのは法を弘めることである、布敎宣傳の精神の無い者には、この祈禱經は渡すべからず、法華行者と云つても、唯だ病人を治すやうな御祈禱ばかりして居る者には、あの錦の囊に入つて居る所の祈禱經を渡すべからずと言つてある。祈禱する者が直ちに惡いとは言はぬけれども、布敎と云ふことを離れたる祈禱はいけない。併し現在は中山法華經寺にも大分えらい人があると見えて、私の著はした『法華經の心髓』などを盛んに讀んで居る人があるやうで、二十部送れ、三十部寄越せと云つて來る、さうして私が感心して居るこ

とは、あゝ云ふ祈禱行者の中から手紙を寄越して、『あなたは大藏經の要義を書き、或は法華經の心髓などを著はされて、道の爲め法の爲めに盡されて居る、私共は朝に晩に同志數人と共に、あなたの長命を禱つて居る』と云ふやうな、非常に精神的の書面を寄越したので、ハハーえらい人も居るなと、私は敬意を表して居る、であるから祈禱坊さんも今日は大分復活しつゝある。この間も何とか云ふ坊さんが來て話をして居つたが、『私も朝晩三卷づゝ別にあなたの壽命の長久を祈つて居る、大藏經要義の完成の爲めに正法興隆の爲めにあなたの壽命を祈る』と言つて居りました、思つたよりえらいと私は感心した。であるからさう云ふ事は、一概に惡く言ふのではないが、日蓮聖人の祈禱經と云ふものは決して迷信的のものではない、正義を天下に布くと云ふ爲に、之を一讀すれば直に精神の復活をすると云ふことを示されたものである、と云ふことを陳べて置くのであります。

本尊鈔の述作

それからこの年四月二十五日に至つて、愈〻本尊鈔と云ふものを造られました。

本尊は本佛中心

是は日蓮聖人が顯はす所の本尊、即ち後に七月八日に至つて本尊が顯はれるのでありますが、それを四月二十五日に先づ本尊鈔を書いて、日蓮が書き顯はす本尊は斯う云ふ意味であると云ふことを示された。その意味はどう云ふことかと云へば、本尊鈔は一冊の書物になつて居つて、その中には色々のことが書いてあるが、是は常々私が言ふ通り、本佛を中心にして光顯せられたものであります。式はやはり中央に南無妙法蓮華經と書いてあります、唱へ言も南無妙法蓮華經でありますけれども、本佛を離れては駄目である。故に觀心本尊鈔の總結の文と云つて有名なものがある、總結と云ふのは一鈔の纒りを附けてある所である、そこまで行かなければ、網を引いて大綱を締めないやうなものである、本尊鈔の教義が幾ら澤山あつても、一つ引張れば其處へ集まつて來る、その總結の文は何と書いてあるか。

佛大慈悲を起して

佛、大慈悲を起して、妙法五字の袋の内に此の珠を裹みて、末代幼稚の頸に

懸けさしめたまふ。

と斯うある。その『佛、大慈悲を起して』と云ふことが一番大事なことである。

『佛、大慈悲を起して』と云ふことが一番の出發點である、『五字の袋』と云ふのは、南無妙法蓮華經と云ふ、即ち字なり言葉なり、この五字なり一語なりの中に結構な珠がある、その珠と云ふのは何であるかと云へば、眞理とも言へるし、一念三千とも言へるけれども、それに一切釋尊の功德を添へてあるものが珠である、

功德の三千

『功德の三千』と云つて、是も學問せんければ分らぬけれども、唯だ眞理だけ說いたのでは冷たい珠である、それでは駄目だ、眞理もあれば佛の慈悲もあり、智慧もある、功德もある、一切の珠である。所謂本尊鈔にある通り、

釋尊の因行果德の功德

釋尊の因行果德の功德は五字に具足す。

その功德を具足したものでなければならぬ、その功德を具足したものが、この袋の中に這入つて居る。さうして『幼稚』と云ふのは吾々である、幼稚の『頸』とは吾々の信仰である、『懸けさしむ』と云ふのは、本化上行を遣はして即ち日蓮聖人をして吾々にこの信仰を起さしむることである。佛が大慈悲を起すと云ふことが出發點である、この精神的活動が無ければ何にもない、後はカラッポである。

本尊鈔の大精神

これが即ち觀心本尊鈔一鈔の大精神であります。諸君が本尊を拜する場合に於ても、『佛、大慈悲を起して妙法五字の袋の內に此の珠を裹み、末代幼稚の頸に懸けさしむ』と云ふ、是だけの事を覺えて本尊に向へば、簡單にしてちやんと纏るのであります。

顯佛未來記とその豫言

それから五月十一日に至つて顯佛未來記と云ふ有名な御書が出來た。是は日蓮聖人が自分の死んだ後の事、即ち未來記と云ふものをお書きになつた、前には釋尊の豫言を示し、後には日蓮自身の豫言を說いたものが、この顯佛未來記であります。その豫言と云ふのは、

・日は東より出でゝ西を照す

と云ふ一言である。日本に本當の文明が開けて、世界をこの光に依つて照すと云ふことを、日蓮聖人は豫言として留めた、是が即ち顯佛未來記であります。

本尊の圖顯

それから七月八日愈〻本尊をお顯はしになる、是が即ち閻浮提第一の本尊と稱するものであります。併しこの『始』と云ふことに就て、人は迷うて居るから一言するが、始めてお顯はしになつたのと、二度目にお書きになつたのと、價値が違うやうに言ふけれども、それはつまらぬことである。『始』と云ふことは、お釈迦様が法華經を說かれてから後、日蓮聖人に來るまでの所を言ふことで、觀心本尊鈔の初めに『如來滅後五五百歲始觀心本尊鈔』とある通り、『始』と云ふのは、自分の二度目に對する始ではない、日蓮聖人が二度目に書かれやうが、三度目に書かれやうが、皆是は未曾有の大曼荼羅である、未だ曾て無いと云ふことは、自分の後に書かれることに關係は無いのである。佛滅後二千二百二十餘年の間、一閻浮提の內未曾有の大曼荼羅である、この未曾有と云ふことは、佛が入滅せられてから日蓮聖人に來るまで、世界中に無いと云ふので、日蓮聖人が文永十年七月八日に本尊を始顯せられたのであるから、それから後幾ら澤山書かれても、その次に顯はれるのも皆な未曾有の本尊であります。即ちこの『始めて顯はす』と云ふことは、佛滅後に對して言ふのであり、世界に對して言ふのであつて、日蓮聖人が自分の書く一度二度といふに就て言ふのではない。其處を能く考へなければ駄目である、日蓮聖人が死に際に池上で書かれても、それはやはり未曾有の本尊であります。然るに一遍初めに書いたのは良くて、二度目のは少し惡くなり、三度目のは段々効目が稀薄になり、百枚目には効能が無くなると云ふやうな事が何處から出て來るか、そんな馬鹿なことはない。學問する者がそんな馬鹿な頭に捉はれて、本尊に對して左樣な下らない見解を持つて居ると云ふことは、禍ひなるかなであります。生きて居る佛樣だから何遍使つてもそんな薄くなつたり、濃くなると云ふやうなことはない。始顯の本尊がどうだとか、二度目のがどうだとか、

始とは未曾有の事

始顯と弘安との爭議

弘安三年のが宜いとか、それはいけない。日蓮聖人が顯はされたものならば、即ち七月八日から臨終の際に至るまでの本尊、どれでも皆結構、又日蓮聖人がお書きにならぬでも、その後の人が書いたものでも結構である、全宇宙に實在する本尊を、吾々は信ずるのでありますから、字ばかり有難がつて居るやうでは、やはり思想界に於ては價値が無いのであります、一旦玆に示された以上は、日蓮聖人の書かれた本尊の字がすつかり燒けてしまつても、日蓮聖人の主張したる活きた宗教の意義と云ふものは滅びるものでないのであります。

聖人の所を訪ふを禁ず

それからこの十二月に至つて非常に又讒言する者があつて、日蓮聖人の勢力を嫉む結果、日蓮聖人の所に寄附く人間があると、信者になつてしまうから、寄附くべからずと云ふことを極めたので、『日蓮に寄附くな、罪人の説教を聞くことならぬ』と云ふのであります、非常に聖人お困りになつたのであります。

法華行者値難鈔

翌文永十一年、聖人五十二歳、正月十四日に於て日蓮聖人は、難に値ふ御書（値難鈔）と云ふのをお書きになりました。今まで佛教の歴史を見れば正義の爲に難に値つた人は澤山あるので、難に値ふと云ふことは結構な事であると云ふ、どうしても混濁なる人生であるから、正義を主張しても難も起らぬやうな事では平凡な者である、亂れ濁つた世の中に正義を主張しても波風が起らぬのは、その者が一緒に濁つて居るからである、正義を主張すれば必ず難が起る、難は正義を計る所のメートルである。然るに日蓮の如くこの難に値つた者は、今まで、、、えらい、、人は澤山あるけれども、一番高い所のレコード破りだと云ふことを、値難鈔に書かれた。日蓮の主張が偉大なるが故に迫害も亦大きい事が分ると云ふのであります。」

正義の主張と迫害

時宗の天感と聖人の敕免

それから二月八日に至つて、不思議な事に北條時宗の頭に天感がパッと降つた。その天感はどう云ふものであるかと云へば、色々傳説があるが、綺麗な童子が二人、赤い着物と青い着物を着た童子が、鎌倉殿中に天降つて來て、『コラコラ時宗』と呼んだと云ふ、時宗がウッラ〳〵坐睡りをして居つた時に、綺麗な童子が現は

れた、ハッと思ふと『實にお前は不都合な奴だ、何者聖者日蓮を何時までも佐渡が島に流して置くか、彼の人を喚び返さなければ、日本の國は危いぞ』と云ふやうな事を、時宗に告げた、それは本當であつたかどうか知らぬが、兎に角時宗が何かに氣附く事があつて、さうして『日蓮聖人を赦すが宜からう』と云ふことになりました。

日朗と赦免狀

さうして二月十四日赦免狀を日蓮の弟子日朗に渡しました。日朗は師匠思ひであるから、之を一刻も早くお師匠様に差上げやうと云ふので、鎌倉を出發して道中を急いで、三月七日夜に佐渡が島の小木濱と云ふ所に着き、その夜は一泊して、翌八日道を急いで道の惡い山坂路を、日朗は一刻も早くお師匠様に赦免狀を傳へたいといふのでやつて行つた。その内に段々夜は更け渡り、山坂に掛つて足は疲れる、寒さは寒し、未だ舊曆の三月初めでありますから、雪も消えやらず、中々寒い、そこで日朗は遂に山坂の所で足が痛んで歩けなくなつてしまつた。それから聲を限りに『日朗が赦免狀を持つて參りました』と言つて叫んだ、すると不思議な事に、日蓮聖人庵室に居られて、この聲を聞附けられて、『ハテな、あれは確に日朗の聲だ、日興お前出て見て來い』と云ふことになつて、弟子の日興が炬火を點けて見に行くと、果せる哉、日朗が途中に倒れて『御師匠様々々々』と言つて居る、それから扶け起して介抱しつゝ庵室に連れて來ると、赦免狀を持つて來たと云ふことである。その時日蓮聖人が非常に悅んだと云ふ說もあるけれども、日蓮聖人がそれに依つて飛立つほど悅んだ譯でもない、但し悅ばぬ譯でもない、『コンなもの』と云つて赦免狀を投げつけたと云ふものもあるがそれはいけない。

日蓮聖人は常に鎌倉に歸りたいと考へて居られた、それは自分一人の爲めではない、未だ色々天下を諫め、さうして日本の爲めに、一切の人々の爲めにやらねばならぬと云ふ考があるから、佐渡の土になることを慨いて居られたのであります。その事は日蓮聖人自ら言つて居られます。それは光日房御書に、

千引の石は浮ぶとも

されば大海の底の千引の石はうかぶとも、天よりふる雨は地におちずとも、日蓮は鎌倉へは還すべからず。（光日房御書　一四一六頁）

どうしても汝は歸さぬ、大海の千引の底にある石が縱し浪の上に浮ぶとも、天から降る雨が地に落ちないやうな事があらうとも、日蓮を生けて鎌倉へ歸さぬ、どうしても日蓮は生かして歸さぬと云ふ積だらうけれども、日蓮は法華經の威力、信心の力がどの位強いか、必ず生きて鎌倉へ歸らねば措かぬと考へられた。これは面白い事であります、向ふはどうしても歸さぬとして居るが、日蓮は屹度歸つて見せる、

聖人歸鎌の誓願

但し法華經のまことにおはしまし、日月我をすて給はずば、かへり入りて又父母の墓をも見るへんもありなんと心づよく思ひて、梵天帝釋日月四天はいかになり給ひぬるやらん、天照大神正八幡宮は此國にをはせぬか、佛前の御起請はむなしくて、法華經の行者をばすて給ふか。もし此事叶はずば日蓮が身のなにともならん事はをしからず、各各現に教主釋尊と多寶如來と十方の諸佛の御寶前にして誓狀を立て給ひしが、今日蓮を守護せずして捨て給ふならば、正直捨方便の法華經に大妄語を加へ給へるか、十方三世の諸佛をたぼらかし奉れる御失は、提婆達多が大妄語にもこへ、瞿伽利尊者が虛誑罪にもまされたり。設ひ大梵天として色界の頂に居し、千眼天といはれて須彌の頂におはすとも、日蓮をすて給ふならば、阿鼻の炎にはたきぎとなり、無間大城をば出づる期おはせじ、此罪をそろしとおぼさば、いそぎ〳〵國土にしるしを出し給へ、本國へかへし給へと、高き山にのぼりて大音聲をはなちてさけびしかば、九月の十二日に御勘氣十一月に謀反の者いできたり、かへる年の二月十一日に日本國の警固たるべき大將どもよしなく打ちころされぬ、天のせめという事あらはなり。此にやをどろかれけん、弟子どもゆるされぬ。而どもいまだゆりざりしかば、いよ〳〵強盛に天に申せしかば、頭の白き烏と

び來りぬ、彼の燕の丹太子の馬烏の例、日藏上人の、山がらすかしらもしろくなりにけり我がかへるべき時やきぬらんと、ながめし此れなりと申しもあへず、文永十一年二月十四日の御赦免狀同三月八日に佐渡の國につきぬ。

同十三日に國を立ちて網羅と云う津にをりて、十四日は、かの津にとどまり、同じき十五日に越後の寺泊の津につくべきが、大風にはなたれ、幸に二日程をすぎて柏崎につきて、次の日は國府につき、十二日をへて三月二十六日に鎌倉へ入りぬ。（光日房御書一四一六頁）

聖人信仰の勝利

斯くして日蓮聖人は鎌倉へお歸りになるのでありますが、之には日蓮どうしても歸つて見せると云ふ覺悟があつたのであります。千引の底の石が大海に浮んでも赦さぬと極めて居つたが、法華經が實か不實か、日蓮は必ず生きて歸つて見せると云ふ。そこで日蓮聖人が勝つたので、赦免狀が愈〻日蓮聖人の手に這入つた。自分の身が赦されると云ふことは大して嬉しい事ではないが、法華經の行者は龍の口の首の座に坐つても首は飛ばぬ、佐渡が島に前後四ヶ年押籠めて置いても命は無事だ、この通り生きて鎌倉へ歸る、意氣は一つも弱つて居らぬと云ふので、鎌倉殿中に來て三度目の諫言と云ふことを日蓮聖人はなされたのであります。

歸途の實況

十五日に越後の柏崎に着き、夫より信州を通過される時、又反對の者共が日蓮聖人を害しやうと思つたけれども、是は役人共が保護して害することが出來ず、武藏の兒玉と云ふ所にお着きになり、久米某の宅に御安着なさつて、十二日を經て、鎌倉の方へ御安着になるのでありますが、それは佐渡後の光景、この次の一節に移る譯であります。

身延記

十二　佐渡已後

誠に身延山の栖はちはやぶる神もめぐみを垂れ天下りましますらん、心無きしづの男しづの女までも心を留めぬべし、哀れを催す秋の

暮には、草の庵に露深く、檐にすだくさゝがにの糸玉を連ぬき、紅葉いつしか、色深うしてたえ〳〵に傳ふ懸樋の水に影を移つせば、名にしおふ龍田河の水上もかくやと疑はれぬ、又後ろには峨峨たる深山そびへて、梢に一乘の果を結び、下枝に鳴く蟬の音滋く、前には渺々たる流水湛へて實相眞如の月浮び、無明深重の闇晴れて法性の空に雲もなし。

觀念の牀の上に夢を結べば、妻戀ふ鹿の音に目をさまし、我が身の内に三諦卽一一心三觀の月曇り無く澄みけるを、無明深重の雲引覆ひつゝ、昔より今に至るまで生死の九界に輪廻する事、此の砌にしられつゝ自らかくぞ思ひつゞけける。

立わたる身のうき雲も晴れぬべし
たへの御法の鷲の山風

建治元年八月二十一日　日蓮

（身延記）

幕府への第三諫

文永十一年三月に赦免狀が日蓮聖人の御手に入りまして、その三月二十六日に鎌倉に御歸りになりました。さうして鎌倉に於て何をなされたかと云うと、四月八日に聖人の方から執權北條の殿中へお出でになりまして、面會をお求めになりました。所が執權時宗の代りに內管領賴綱が出て聖人に面會をしましたが、それは從前の無禮な態度には似ずして、今度は大いに敬意を表して、鄭重に殿中に御案內申上げたのであります、時宗も御簾の中から賴綱との話を聽いて居ると云ふやうな譯でありました。その時日蓮聖人は、前に提出せられました安國論の精神を繰返して力說せられたのであります。その趣意はどう云ふ事であるかと云ふと、

安國論の主張を力說す

この安國論は自分が一時の思ひ出に書いたものでない、眞に國を思ふの精神から心血を濺いで書いたものである。國は唯だ國として維持せられるものではないのであつて、國は即ち國民に依つて維持せられるのである、その國民の精神は敎に依つて維持さるべきものであるから、即ち國には人心を指導する所の敎が無けれ

ばならぬ。世界の歴史を繙いて各國の興廢の跡を見ても、之を末の方から見れば、或は經濟とか或は軍備とか云ふものゝ整はざるが爲に倒れた國もあるやうに見えるけれども、その軍備經濟の盛衰も皆是れ國民の精神が本になつて居るのである。形式上どれ程軍制を立派にして兵隊を多くして見た所で、その精神教育が缺けて居つたならば何にもならない。現時の歐洲の大戰亂でも明かである、軍隊の數から云へば、聯合軍の方が事實多數であるけれども、而かも獨逸の少數の軍隊には屢〻敗けて居るのである。吾々は聯合國の一員として聯合軍の敗ける事を口外したくはないが、併し事實はどうもその通りである、露西亞もやはりその通りで、獨逸より軍隊の多い時でも敗けて居る。であるから軍隊と雖も精神を第一としなければならないので、世の中の一切萬端は皆悉く精神から出發すべきものである、この精神を整へるには、唯だ一時的の教訓では駄目であつて、永久に存續する教に依らなければならない。我國の國民精神にしても、やはり明治維新以後五十年、否もつと舊く幕府時代からの教訓に由つて來つて居るものであつて、世人は兎もすれば宗教に弊害があると言うて之を排斥せんとするのである、弊害があれば改善をすると云ふ精神は宜いが、現代の人は頭から宗教の弊を見て不必要を叫ぶのである。斯の如くに人心をして宗教の必要を認むる能はざらしめた結果、今日のやうな頽廢せる民風が起つて來たのである。どうしても宗教と云ふものは、吾人の精神生活には無くてはならぬものである。勿論經濟の整ひ、軍備の整ふと云ふこともなければならぬが、その經濟なり軍備なりが振興するか否やと云ふことも、即ち國民精神の發揮と否とに於て岐かるゝのである。即ち經濟、軍備を強大ならしむるのも、すべてこの精神の力である、この精神を陶冶すれば強大なる力と清らかな光とを生ずる、一軒の家にしてもサア是から商賣をやらうと云つて熱心になる時分には、唯だ金儲けだとか、經濟だとか云ふことを考へて居るだけでは足らぬ、其處には何等か自分が決心したる一種の光明が胸の中に輝いて來ね

ばならぬ、故に人心に宗教の信念を與へると云ふことが、民心善導の上に最も大事なのである。然るに維新以後の我國は、法律を以て國を治むると云ふことになつて居るが、法律の本は道德ではないか、而して道德の本は又宗教ではないか。然るに法律は良いが道德はいけない、道德は良いが宗教は尊ばないと云ふやうなことで、茲に斯う云ふ頽廢せる民風が出來上つてしまつたのである。之を根本的に匡救するには、どうしても大切なる道德の指導に俟つて民心の根柢を培養することが必要なのであります。然るに日蓮聖人の憤慨せられたのは、承久の亂の事に就て、北條がこの大切な道德の大本を忽せにして居つたから、國家の上にも陛下を流し者にし奉るやうな不敬な事が出來たのである。さうして又宗教の方には立派な法華經なりお釋迦樣なりを、蔑ろにするやうな事をするに至つたのである、斯くて他の國から攻められゝば、竟に日本の國がやられてしまうやうな事になる。何ぼ山伏を頼んで法螺の貝を吹いて貰つても駄目だ、それを救ふにはどうしても良き教を立てゝ思想上から民心を鍛へる事と、それから立派な宗教を打立てゝ神明佛陀の感應を受くるに足るだけな清い信仰を、國民に鼓吹せんければならぬと云ふのが、安國論の精神である。どうしても前年から申して居るこの立正安國論の精神の御採用を願はんければならぬ。私を佐渡が島から御赦しになつたと云ふのはどう云ふ譯であるか、日蓮は外に罪あつて流された者ではない、唯今申す立正安國の主張に於て、それがいけないと云ふので壓制を以て龍の口に首を斬らんと爲さつたけれども、首が斬れなかつた、それから佐渡が島へ流し者になつて、今度御赦免と云ふのであるが、是はどう云ふ譯であるか、日蓮身に一分の罪もなくして或は首の座に引出され、或は流し者にされた以上は、之を御赦しになると云ふに就ては、日蓮の主張が宜しいと云ふことになつて御赦しになつたのであるか、主張に關係が無いならば、初めから流すと云ふ事はない筈である、流したのを赦したと云ふのは、前には日蓮の言ふ主張が惡いと思つて流したけれども、今

赦免の趣旨を確む

度はその主張の善いと云ふことが分つたから還れ、と云ふことでなければならぬ、どう云ふ譯であるかと云ふて駄目を押したのであります。唯だ身だけ歸れと云ふことであるか、身だけなら元來罪も何にもない、日蓮は泥棒もしなければ、人の頭も叩かぬ。この主張信念は昔のやうに日蓮は少しも變つて居らぬ、前には流して今度赦すと云ふのは、どう云ふ譯であるか、あなたの方のお考が變つて日蓮の言ふ事は尤もだと云ふことになつてお赦しになつたのか、どうだと言ふので確められたのであります。大抵の者ならばモウそんな事を言はずに、赦されて歸つたら有難い事だと云つて、赦免狀を戴いて悅ぶべき所だけれども、其處は日蓮聖人の信念と云ふものはさうでない、斯う云ふやうに駄目を押されたのである。所が

來寇の年月を明答す

賴綱の方で答へて言ふには、それは大事な問題だから御尤な事だ、就ては安國論にある他の國が日本に攻めて來ると云ふことは、何時頃來るのであるか、と云ふ事を尋ねた。それは賴綱が問うたのであるけれども、實は時宗がそれを問はしたのであります。その時日蓮聖人の答は、

經文には何時とは見え候はねども、天の御氣色怒少からず。

仁王經を讀んで見ても、藥師經を讀んで見ても、何月何日に蒙古が日本を攻めると云ふことは書いてない、けれどもどうも今日蓮が考へて見ると、即ち日本の方でやつて居る事柄は、曩に言ふ通り國内に就ては我國の一番大事な勤王の大義を破つて、義時ばらが天皇をお三人まで流し奉つて、而もその罪を悔いない、下に民心を欺いて租稅を免じたり、少しばかり社會政策を施して懷柔して居る。人民は愚なものであるから、己れが租稅でも少し安うして貰へば、その政治家が上に向つて如何なる大逆を犯して居つても分らない、北條様々々々〳〵と云つて、皆懷いて來る。坊主も今までは京都で朝廷の爲に祈禱して居つたのを忘れてしまつて、鎌倉の勢力が熾んなるが故に、鎌倉へ來て犬の如く尾を振つて鎌倉の武運長久を祈ると云ふやうな事になつて居る。斯の如く大義名分を忘れて國民一般が朝廷の

御威德を忘れるのは、許すべからざる事である。又敎の方から云へば、法華經を侮り、釋迦牟尼佛を押込んで、阿彌陀如來とか大日如來を引張つて來る、釋迦如來は唯だ名前だけの佛ではない、本當の活きた佛樣である。阿彌陀如來、大日如來と云ふは唯だ名前だけのものである、お釋迦樣が說いたとか說かぬとか云ふに過ぎぬ。釋迦牟尼如來は佛敎を開かれた所の現實の如來である。然るに釋尊を蔑ろにするに至つては、天の御氣色怒少からず、諸天善神は激怒なさつて居る、事急に見えて候。蒙古が我國に襲來して來ると云ふことは、モウ急々の事に迫つて居ります。

よも今年は過し候はじ。

今年は越さない內に來るのでありますと言ひ放つた。是が文永十一年四月八日の事でありますが、果せる哉、蒙古來は文永十一年――即ちこの年の十月に於て壹岐對島を襲うて、さうして肥後の松浦に至つて、この前述べた通りに男は皆頸を

幕府の懷柔策

叩き斬り、女は皆數珠つなぎに掌に孔をあけて、さうして舷に繫いで一人も殘らず酷い目に遇はしたのである、非常にこの蒙古襲來の事は激しい有樣に現はれて來たのでありますが、是は殿中に於て五ヶ月も前の四月八日に、日蓮が『よも今年は過し候はじ』と斷言したのであります。是が日蓮聖人の諫言三度と云ふ中の最後の諫で、三諫の第三であります。

所が同月十二日に於て北條の方から妥協を申込んで來ました。この間のお話では洵に氣味の惡いことで、『天の御氣色怒少からず』『急に見えて候』では、甚だ困る事であるが、あなたはどうか國家安泰の御祈禱をして、今までのやうな酷い事を言はぬやうにして貰ひたい、さうすれば茲に立派なお堂を拵へて、さうして田地を千町そのお堂に附けて、あなたの生涯安心してお暮しになる樣にする事故に、どうか今までのやうな手嚴しい事を言はぬやうに、國家安泰の御祈禱をするやうにして戴きたいと云ふことを、北條が態々使を遣はして、禮を厚ふして日蓮

聖人の峻拒と時宗の感動

聖人に申込んだ。所がそれに對して日蓮聖人が何と御答になつたかと云ふと、その答は實に峻嚴である。北條は武士に似合はぬことを云ふ、この間も言つて置いた通り、日蓮を赦す赦さぬと云ふことは、日蓮の主張に關する事である、日蓮の主張と云ふものを取つてしまへば、日蓮を罪する事も赦すこともない、日蓮の主張を赦すと云ふことであるならば、堂を造ると云ふやうな事は要らぬ、先づ以て日蓮が言ひ居るのは、日本國の思想界を正せ、佛法の方に於ては邪法邪宗を誡めよ、釋尊の敎の正義正道を發揮せよ、國家に就ては大義名分を明かにして、北條自ら爲して居る所の大逆の行爲を改めよと云ふことを言ふのである、何も日蓮が美味い物を食ふ食はぬ……そんな事はどうでも宜い、北條は武士にも似合はぬ、日蓮に諛へるものである、莊田千町何かあらんと云つて、日蓮聖人が手嚴しく之を蹴つた。所が之を蹴つたに就て、時宗は『流石は日蓮だ』と言つて敬服した。成程日蓮は全く國を思ひ法を思ふと言ふが、大抵の者ならば莊田一千町を以て之を歡迎した時に於ては、先づ言ふ事を肯くてあらうに、莊田千町何かあらん、北條は武士にも似合はぬ諛へる者であると言ふに至つては、感心な聖者だと云ふのて、非常に感心して、之を京都の方へも申立てゝ、日蓮と云ふ者はえらい者であるから、彼は自由に彼の主張を日本國中に弘めるやうにさせたいと云ふので、時宗の方から申送りました爲に、遂に同年五月二日に至つて宗門弘通の牒狀と云ふものが、京都から下るのであります。是は名高い書面でありまして、宗門を自由に弘めても宜しい、今までのやうに、日蓮が何か言へば取捕まへて流すと云ふやうな事はしない。

宗門弘通の免許

頃年數多眞法之威力、御感尤深、三國無二比類一妙宗、後代難有尊僧、何宗比之、於二日本國中一宗弘不レ可レ有レ妨者也、仍執達如件

文永十一年五月二日　　城左兵衞奉

日蓮大上人

日本國中弘通は妨げないと云ふ書付が下りまして、茲に日蓮聖人は、公けに主義を弘める事の許可を得たのでありますが、是で喜んで日蓮聖人が鎌倉に踏留まつて説法するかと云うと、せないのであります。其處は日蓮聖人の志の大なる所が現はれて居るのでありますが、この牒狀を手に握つた日蓮聖人は大して悦ばない。唯だ宗旨を弘めても差支ないと云ふ、自分の主張の差支ないと云ふ位の事はそんなに有難くも何ともない、今まで紊れ切つて居る日本の思想界を覺醒しやうと云ふのが、聖人の御考であるから……。けれども北條は共に語るに足らぬと云ふので、三諫容れられず身退くと云ふことになる。

聖人の三諫とその主張

その三度の諫と云ふのは、最初の安國論を捧呈せられた文應元年七月十六日、それから二度目は彼の文永八年九月十二日、一昨日御書を以て極諫し、續いて龍の口に引出される時平の左衞門尉に向つて松葉が谷に於て諫言した、即ち『日蓮を倒す者は日本の柱を倒す者なり』と言はれた。それから第三は唯今述べた通り文永十一年四月八日殿中に於て『よも今年は過し候はじ』と言つた最後の諫言。斯の如く反省を促したが、その主張の要旨は第一が勤王論であります。安國論を御覽になつても分りますが、承久の亂を承けて『後鳥羽の院の御宇に法然といへる者あり』と言つて、非常に日蓮聖人は之を攻擊せられた、聖人が念佛無間と言ふのは、この後鳥羽天皇を隱岐の國に流し奉つたと云ふやうな惡逆無道なる事を見るに至つたのは、念佛などが出たから、その災に依つて斯の如き事が起つたと、日蓮聖人が考へたからである。それが事實上關係があるか無いかは兎に角、聖人の道德的判斷はさう考へられた、であるから北條に對する諫と云ふものは、第一に大義名分に悖ると云ふこと、それから日本の國家を安泰にする爲に蒙古來に備へる事、さうして精神界には迷信を正して、立派な敎を明かにすることであります。所がそれだけの事を北條はヨウやらない、北條は下に民心を欺いて、少しばかりの慈惠的の事をやつて、上朝廷の權能を抑へて行かうとするのである、北條

のやり方は頗る不都合である。今の政治家も何かするとこの北條に類するやうな者が出て來ないとも限らぬ、無智なる多數を煽てゝその間に自分が何事をかしやうと企てる、多數と云ふものは尊敬すべき事もあるけれども、時には危險が多數の中より胚胎するものである、多數を煽て上げて不正な考を行はうとするやうな政治家あらば、最も警戒すべきである、本當に國を思ふ精神であるならば宜いけれども、ワイ〳〵やつて自分が妙な事をやつて、巡査と喧嘩して巡査の扱ひが惡いと云つて、上野の山でガタ〳〵やるやうな事は甚だ不都合の事である。私はどの政治家にも與しないけれども、全體政治と云ふものはあんなものでない、あれではやはり坊主がドンドコ騒いで石炭箱を叩いて居ると同じやうな流儀である、眞の政治と云ふものはあゝ云ふ雜駁なものでない、モウ少し眞面目に輝くものがなければならぬと思ふ。日蓮聖人は三度諫めたけれども、どうしても北條が改めることをしないから、斯の如き者を相手にしては駄目だと云ふので、

諫めて退くは古の道

伯夷叔齊の故事

三度諫めて用ゐられざれば退くは古の道なり。

と言はれた。この古の道と云ふことが、日蓮聖人に就ては非常に大事なことなのであります。是はお釋迦樣の方から來たのでない、即ち日蓮聖人は唯だ釋迦の教を弘めて居るばかりではない、東洋文明の大事な點を皆握つて立て居るのであるから、茲に古の道と云ふのは伯夷、叔齊が、周の武王を諫めた事である、是は古い話のやうだけれども、是が明治維新の宏業をも翼けたのである。周の武王と云ふのは小さな國の王樣で、元是は殷の紂王の臣であつた、殷の紂王と云ふは、支那全體を支配して居る所の王樣である、それが惡逆無道の人であつたものであるから、周の武王が自分の戴いて居る紂王ではあるが、餘りに惡逆なるが故にと云ふので、戰を起して之を討つと云ふことになつた。その時に伯夷、叔齊と云ふ賢臣があつて、武王の戰に行かうとする馬を叩いて諫めて曰く、暴を以て暴に易るなかれ、縱し殷の紂王が惡逆であらうとも、臣下の身を以て君を討つと云ふ

ことはない、思ひ止らなければいけませぬと言つて諫めた。けれども周の武王は之を肯かない、戰の首途に不吉な奴だ、斬つてしまへと言つて怒つたが、太公望と云ふえらい爺さんが居つて、それはいけませぬ、彼は賢者なり、賢い人であるから殺してはいけぬ、と云ふので仲裁に入つた爲に、殺す事を止めて、殷の紂王を討ちに行つてしまつた。そこで伯夷、叔齊は、周の粟を食むに忍びずと云つて、西山に隱れて蕨を食つて死んだのでありますが、併し是は非常にえらい人であります、頑固な親爺と思ふ人もあらうけれどもさうでない、この正義の觀念が大事である、人は正義を本としなければならぬ、であるから伯夷、叔齊は、その當時誰一人として認める者は無くとも、自ら正義の爲にさう云ふ苦節に甘んじて生を終つたのである。それが後世に傳はつて段々問題になつて、伯夷、叔齊は、どう云ふ者だと云ふことは、孔子も論じ、孟子も論じ、韓退之も論じ、司馬遷も論じ、皆ズッと論じて來た、日本にもそれが傳はつて來て居る。支那の文明は伯夷叔齊と

夷齊と明治維新

義公の大日本史

云ふものを馬鹿にしてしまつたが爲に、今日のやうな有樣になつてしまつたのである、日本の文明は明治維新の宏業も、伯夷、叔齊の方に與したが爲に、斯う云ふ立派な國運を開いた、その點を考へると伯夷、叔齊と云ふものはえらい者であります、伯夷、叔齊が日本今日の國運に關係があるナンと言うと、馬鹿な事を言ふなと云ふ人もあらうが、若し伯夷、叔齊が無かつたならば、維新の宏業の源を爲した水戸の大日本史と云ふものも出來なかつたのである。是は名高い話であるが、光圀卿が十八歳の時、司馬遷の書いた史記の伯夷、叔齊の傳を讀んだ所が、今の『馬を叩いて諫めて曰く』の所に至つて大いに感憤興起せられた、是だ、支那人てさへ斯の如く云つて居る、殊に日本にしては如何に臣下が勢力を得たからと云つても、天子樣を流し奉るとか、天子樣を追込めると云ふやうな事はあるべきでない、と云ふので以て光圀卿が非常に感心して、大日本史を書くことになつた、將來の爲に皇統の大切な事を明かにしなければならぬと云つて、百年の間毎年十

萬石宛の俸祿を抛つて、さうして大日本史が出來たのである。十萬石と云うと今日の米の高い相場にすれば大變である、一石二十圓としても十萬石で二百萬圓、一年二百萬圓宛百年とすれば二億圓である、二億圓の金を抛つて大日本史を編纂せられた、その本は伯夷、叔齊に感服したからである。その感服した證據は今小石川の砲兵工廠に行つて御覽なさると分るが、あの内に後樂園と云ふのがある、その後樂園に伯夷、叔齊の二人の爺さんの木像がある、一人は立つて一人は少し腰を屈めたやうな二つの木像がある、行つて御覽なさい、それで自分も隱居してから西山公と稱せられた、即ち伯夷、叔齊が西山に入つて蕨を食つたと云ふので、それに因んで光圀公は西山公と稱して居たのであります。さうしてこの大日本史があるが爲に、段々忠義の侍も出來て、さうして明治維新の宏業が成立つたのである。それもやはり光圀卿の感化から、一つ橋家と云ふ水戸系統の人が地位を得て將軍になつて居つたから、早速大政奉還と云ふことになつて、戰をしないで、

身延の隱棲と義公

江戸を火中に葬らないで　天皇に大政を奉還して王政復古になつたのである、その本は伯夷、叔齊から來て居るのであります。

そこで日蓮聖人が今身延へ入るのも、三度諫めて用ゐられず身退くは古の道なり、と言はれたのは、伯夷、叔齊を學んでの言である、身延山と云ふのは、やはり西山に擬されたのであつて、蕨を食ふべき覺悟を以て入山せられたのである。北條を諫めたけれども諫を肯かない、之を討倒して取つて代ると云ふことは、佛敎の僧侶としてやるべき事でないから、時を待つより仕方がないと云ふので、諫言を北條へ打込んで置いて、今にも蒙古の襲來があり旁々して覺る時もあらうと云ふので、責任を北條に持たせかけて、さうして自分はいよ〳〵五月十二日に鎌倉を去つて、五月十九日に甲州波木井の身延山にお移になつたのであります。佐渡より歸られてから殿中に於て高唱する事と、それから莊田千町何かあらんと云つて北條の愚を嘲つた切りで、一切布敎しないで、さうして身延へ入つてしまは

れた。宗門弘通差支ないと云ふ牒狀を握つても、構はないで山へ入つてしまはれた。是はどう云ふ譯であるか、宗教家ならば、今までは石を打つけたり惡口せられたけれども、今度は公然とやれるから安心だと云つて、皆な寄つて來いと云ふ譯で、同志を集めて大いに宣教すべきに、布教しないで枚を嚙んで甲州身延の山に入つたと云ふのは、是が日蓮聖人の偉大な所であります。それは無論宗教は一人一人を感化すると云ふことも目的だけれども、日蓮聖人の御理想は、この宗教を一人一個の爲に立てる宗教として御考へなさらぬ、日本國家の爲に打立てる宗教と云ふことが、日蓮聖人の目的であります。無論國家と云ふものも、人を捨てるものでもなければ、宗教も人を捨てるものでないけれども、この團結と云ふものに依つて國家は進んで行くのでありますから、國家の團結と云ふものが弱つてしまへば、國民の利益幸福と云ふものは無いのである。宗教もやはりその團結生活に力あらしむる主旨を取つて行くから、一人二人の信者が出來る出來ぬの問題ではなく、どうしても正法を國家に捧げて、さうして國運の發展を期し、依つて以つて個々の幸福と安住とを得せしめやう、王法佛法に冥し佛法王法に合して、さうして相扶けて以て日本を立派な國にしなければならない。斯う云ふお考であるから、三度諫めてさうしてお退きになつた譯であります。さうして是が光圀卿の先覺者を爲したのであります。光圀卿が西山公と稱したのと、日蓮聖人が身延山に隱棲したのとは、同じ系統に屬するものであつて、非常に是は尊い事であります。今日以後と雖もやはり勢力に阿附せず正義を履んで行く者が無くてはならぬ、唯目前の成功ばかり焦つて、斯うもしなければいかぬ、ああもしなければいかぬと云つて、目前の利害成敗ばかりに依つて動く人のみ多くなつては駄目である。己の信ずる主張は當代に容れられなくとも、當代を超越してさうして後代の讖を爲して、一時は人は打張り憎まうとも、その主張と云ふものは後代にまで光輝を放つて、永遠に國家の爲になり民心を裨益すると云ふだけの先見を以て教は立てられなけれ

ばならぬ。一時の譯の分らぬ者の歡心を迎ふるは、敎として價値なきものである。」

身延入山

そこで南部實長は日蓮聖人が身延の山にお入りになりましたから非常に悅びました。他に暖い所であるとか、便利の好い所に信者が段々ありまして、彼方からも此方からも日蓮聖人をお迎へしたけれども、それは日蓮聖人すべて斷はつて、さうして身延の山に入られた。是はどうしても伯夷、叔齊の山に入つて蕨を食ふと云ふことになぞらへて居るのであるから、殊更に不便な身延の山を選ばれたのでありませう。そこで南部公が小さな堂をお造りになつた、是も初め大分大きなものを建てやうとせられたけれども、日蓮聖人は今言ふ通り伯夷、叔齊になぞらへて居るのであるから、大きな堂を拵へて住む位ならば身延へは入らぬ、大きな堂は要らぬと云ふので、小さな草堂を造ることになつた。六月十七日に至つてその小さな堂が出來上りましたので、其處へ入つて連れて行つて居られた弟子等の敎育を盛んにせられ、又信者の方へちよつとした事に就けても叮嚀に書面を送つて、それが一々後世に遺つて人を敎化するに足るやうな文章を書いてお送りになつた。身延の生活の大事の事は、弟子の敎育と信者へ色々な書面を書いてお送りになつて、さうして後來の敎訓を明かにせられた點に在るのであります。

身延に於ける聖人の事業

身延の法悅的生活

日蓮聖人は身延に入られてどう云ふ御樣子であつたかと云ふと、非常に心樂しくお暮しになつた、外界から見れば身延の生活は如何にも不自由の事でありますけれども、聖人の精神に於ては洵に朗かな日月をお送りになつたのであります。彼の有名なる身延山御書に於て、是はモウ多く言ふ迄もありませぬが、この身延山の光景は斯の如く美しい所だと云つて書かれて居る。

理想鄕の聖訓

紅葉いつしか色深うしてたえ〳〵に傳ふ懸樋の水に影をうつせば、名にしおふ龍田川の水上もかくやと疑はれぬ。

楓の葉が筧に、一枚づゝ流れるのを見ては、有名な龍田川の水上に天女が天降りて來るやうな美しさであると云ひ、蜘蛛の巢に露が宿つて居るのを見ては、帝釋

天の喜見城も斯くやと云つてお悦びになつた。さうして法を聞き法を求めた昔の人の事を考へれば、提婆品を讀んで見れば阿私仙人に千歳の間給侍して法を得た人もある、常啼菩薩は東に請ひ、善財童子は南に求め、皆それ〳〵昔のえらい人は法を求めると云ふことに就て苦心をせられた。日蓮は有難い事に、法華經の正義に遭ふ事を得て、さうして法華經の爲に努力を捧げた、こんな嬉しい事はないと云ふことで以て、日蓮聖人の身延の生活は所謂法悦の生活であります、さうして殊に身延山御書の終の所には、彼の有名な

立わたる　身のうき雲も　晴ぬべし

たへの御法の　鷲の山風

と云ふ歌があります、今まで身にふり積つて居つた憂き艱難の雲は、風で吹き拂はれたやうに晴々としてしまつて、我が身の上には、洵に快い妙法の風がソヨ〳〵吹いて居る所の靈鷲山の佛のお出でになる淨土の生活も斯くやあらんと云ふ風な考

聖人思親の孝心

蒙古の來寇

を以てお暮しになりました。さうして日々房州の方を向いては、高い山の上から父母の墓を遙拜して、法の爲に戰つたとは言ひながら父母のお墓にも詣ることが出來ないで、洵に父母には孝養を盡すことも出來なかつたと云つて、晩年殊に父母の恩を感じて、毎朝お經を讀んで追善を祈られたのであります。

この年の十月に至つて愈〳〵蒙古は壹岐對島から松浦の方を侵して參つたのであります、この事に就ては、前に詳しく申上げて置きました。この年日蓮聖人は顯立正意鈔と云ふ御書をお著はしになりました。この御書は安國論の精神を更に適切に述べられたやうなものでありまして、表題に『正しきを立つるの意を顯はす』とある通り、日蓮が立正安國論に於て正しきを立てよ、正しきを立てよと云ふのは、如何なる意味で言ふのかと云ふことに就て、その精神の在る所を述べられた、日蓮が正しき法を立てよ正しき道を盛んにせよと云ふのは、斯う云ふ意味であると云つて、さうしてこの日本は既に日蓮の主張に降伏しながら、唯だ痞我慢の爲に

表面服從しないのである、彼等の主張は既に破れて居るものである、彼等は既に精神の底に於ては、日蓮の主張には敵はぬ事を知つて居るけれども、唯だ外形の名聞名利に捉はれて邪宗を轉じ得ないものであると云ふことを素つぱ抜いて、日蓮の正義を立てる事に於ては、誰も敵する者は無いと云ふほどに、意氣軒昂なる事を書いて、さうして殊に蒙古がやつて來た、安國論に言うた事は全く符合した譯であると云つて、大いに氣焰を吐かれたのであります。

經一の登山と京都宣教

翌建治元年、聖人五十四歳、この年日朗上人が彼の名高い經一麿と云ふ弟子を連れて身延に參り給侍をさせました、是が後に日像上人と云ふ方になつて京都の布教を開始するのであります。日蓮聖人が鎌倉を相手にしても駄目だ、鎌倉は覺らぬから、今度は京都の方からこの思想を普及して來るのが宜いと云ふ御考で、御臨終の時に經一麿に帝都の宣教を遺囑せられて、この人が京都に行つて日像上人となりまして、段々朝廷の方にも申上げ、同志を糾合致しまして、遂に楠公が出

建武中興と日蓮主義

られて北條を倒すやうになりました、此間に日蓮主義者は相當働いて居るのであります、南朝を援けて北條を倒す爲には、日像上人の方の系統が働きをした事は、段々歴史の上に於て今日明かになつて來たのであります。北條は諫言を容れぬが故に、遂に日蓮聖人は日像上人をして京都の方へ行つて働かして、勤王の思想を鼓吹して段々忠義の侍を造つて、遂に楠公の樣な者が出て北條を滅ぼしてしまうのであります、やはり北條は結句日蓮聖人の爲にやられてしまうたのであります。」

北條氏の末路と正義の勝利

又今日から考へて見たならば、賴綱など云ふものは、その當時は非常に威張つて居つたが、弘安七年に至り時宗卒し、子の貞宗十四歳にて執權となるや、安達泰盛は外祖を以て權を專らにし、賴綱と權を爭ふに至つた、泰盛が姓を源氏と改むるや、賴綱これを讒して、將軍とならんとする異志ありと言ひ、即ち同年十一月貞時は兵を發して安達氏を亡ぼし、これより賴綱獨り政を擅にし後遂に叛を計つたから、その長子宗綱これを貞時に告げた、そこで貞時は遂に賴綱を誅

立正觀鈔の著作

し宗綱を流した。斯くの如く日蓮聖人に怨を爲せし賴綱は、聖人の入滅後に叛を計り、我が子の爲に訴へられて誅戮に就いたのである。又北條一門とした所が、北條の泰時、時賴と云ふものは豪かつたやうであるけれども、今鎌倉へ行つても何にも無い、又伊豆の北條の興つた所へ行つて見ても、惡い方のことは殘つて居るけれども、何もえらい事は殘つて居ない。日蓮聖人の方は、日本の到る處にその思想は普及せられ、日蓮聖人の教義に基ゐて南無妙法蓮華經と唱ふる聲は、津々浦々に漲つて、一心に掌を合せて拜む人は次第に殖えて來て居る。今假に賴綱の木像と日蓮の木像と並べて見たならば、賴綱は何でもない者になつて居る。であるから宗教家はその當代に於て直に優遇を受けなくても、その主張主義が萬代に耀けば、それが勝利の榮冠を得たことになるのである。

日蓮聖人はこの年最蓮房の爲に立正觀鈔と云ふ御書をお書きになりました。是も大事な御書で『正觀を立つるの鈔』と云ふのでありますが、この正觀——

信智調和の妙說

正しい觀念と云ふのは、何であるかと云ふことに就て、多く觀念と云ふことは智慧でやるやうに考へて居つたけれども、それはいかぬ、智慧を捨てる譯ではないが、智慧は信念と一つにならなければいかぬ、唯だ冷やかな所の智慧を以て冷たい理窟を揑ね廻して居るやうな觀念は、佛教の中に於ては未だ道程である、本當に觀念が出來上つたら、溫かい信仰に入つて、さうして信仰と智慧とが一致したものとなる。智慧が光つて居る所に有難いと云ふ信仰が活躍する、信智一體と云ふ境遇に至る、遂に信念直ちに觀念と云ふことになつて、本尊に向つて南無妙法蓮華經と唱へて居る信念の中に、最大の智慧が働いて居ると云ふことを、日蓮聖人はお書きになつた。現代の言葉にしますれば、哲學上から來る智識と宗教の信仰とが一致する、哲學は智識だけで滿足して、その結果信念に這入り得ないが、斯かる哲學は駄目なものである。それは近頃少しは分つて來ました、哲學の方でも信念にまで進むべしとの說が起つて來たし、宗教の方に於ても信仰と智識の一

致を説く考が起つて來たけれども、未だ今の文明では其處がはつきりしない。日蓮聖人はそれを徹底的に説明せられた、即ち法華經は智慧の方から言へば、智慧の頂點に達したる教である、天台の一念三千は智慧の極點に現はれて居るものである、併ながらそれを智慧の儘に置いては未だ眞實の宗教でない、更に進んでその智慧から建設せられて、一念三千の教理を本尊の上に顯はし、さうして吾等が信仰を以て攝し得て、その大信仰の中に完全なる觀念と完全なる信仰とを攝收する、大信仰の中に智慧を捲いて説明したものが、正觀であると云ふことを説明されました、是が即ち日蓮聖人の信仰であります。今の多くの日蓮門徒のやうに、ナーニ信心と云ふものは義理も理窟もあるものでない、何も知らぬでも唯だ有難いと思ひさへすれば宜いと云ふ、それはザッと言へばそんなやうなものだけれども、其處ばかり振廻して居つては、日蓮主義の尊い所はない事になる。それは信心と云ふものは有難いと云ふ純粹のものだけれども、盲目滅法唯だ有難いと言つたのでは、天理教も有難い、鰯の頭も有難い、何でも構はず有難いと云ふことになる、それでは法華經の尊さも、日蓮聖人が命懸けで法華經を弘め、又十六歳より二十餘年の間難行苦行を積んで研鑽に研鑽を重ねて、さうしてこの法華經の正義を主張せられた有難さと云ふものが分らなくなる。何でも生くらで宜いと云ふやうな事ならば、別段そんな苦心をする必要もなかつたのである。法華經のさう云ふ尊い方面を侮つてはいけない。己れが法門も聞かぬ、智慧も足りない爲に尊い正義の傳道を嘲ける者があるが、それは確に無間地獄の底に入るべき人である。日蓮聖人はこの立正觀鈔に於てその意を明かにせられたのであります。

日蓮門下の邊見

杜世忠等の來訪

撰時鈔の大要

この年又蒙古よりして杜世忠と云ふ者と、それから高麗の人とが使にやつて來ましたが、執權北條は遂に之を鎌倉に於て斬つてしまひました。六月十日に撰時鈔と云ふ名高い御書が出來上りました。是は大事な御書であります、詳しくは申上げませぬが、時を撰ぶと言はれた所を考へなければならぬ、時を撰ぶと云ふこ

とは、色々深い意味がありますけれども、人と云ふ者に對して時と云ふことが起る譯であります。人と云ふのは、個人で各人別々なものである、冬の寒さでも單衣着て居る人もある、天晴會員の中に冬帷衣着て居る人があつて、帷衣で冬中押通す話を聽いたのでありますが、併しそれは特別な人である。『冬は日本人は何を着て居るか』と云つた時には『帷衣着て居る』『それは何と云ふ人か』『高橋君である』と云ふやうな事を言つたのではいけない、やはり『日本人は綿入を着て居る』と云はなければならぬ。時と云ふものは、一般的に考へなければならぬ。そこで今の時はどう云ふ教が立ち、どう云ふものが大事だか、と云ふことを考へることが必要なのである。熟せざる宗教家の考は、人を論ずるものであつて、『お前は斯う云ふ者だから、斯う云ふやうにやれ』と云ふやうに、個人に對して教を立てる、それが當り前のやうになつて居る。けれども日蓮聖人は、それに反對した、一人々々に就て云へば、馬鹿の者もあり色々あるけれども、それは今言つて居れない、今の日本の時と云ふものは、さう云ふ詰らない思想を打立てゝ居るべき時でない、今日の言語で言へば、世界に日本の光を顯はすには、世界の文明に打勝つて行くだけの思想、日本の宗教、日本の道德、日本の文明と云ふものは、世界を對手にしても打勝てるだけのものを仕上げなければならぬ、切迫して居る時が來て居る、一人二人の人の都合を考へて、是が氣に入つた氣に入らぬと言つて居る時ではない、日本の國家の職分上やらねばならぬ、即ち旭日が東を照して更に西を照すと言ふ如くに、日本の立派な宗教、立派な道德、立派な文明に依つて、世界を導かなければならぬが今日である、分るも分らぬもない、『貴樣日本に生れた光榮の爲に、下らない宗教は捨てて、この立派な宗教に來なければならぬ』と云ふことでなければならぬ、さう云ふ時が今日は切迫して居る。古い昔の野蠻時代ならば何でも宜いけれども、今日は一刻を爭ふ時である、實は最早既に後れて居る、日蓮聖人がこの警告を日本に與へたその時に、立正安國の思想を取り、民心

統一の思想を執つて、下らない宗教を捨てゝ、日蓮聖人の言ふ大理想を以て國民を導いて、國家の發達を圖つて居つたならば、確に日本の天職を今日よりは數段發揮し得たに違ひない。既に後れたりと雖も爲さざるに勝る、洵に殘念であるけれども今日より更に揮を締め直して、日蓮聖人の教に聽かなければならぬ時である。その事を懇々説明せられた、中々長い御文章でありますが、要するに全體の時を論ぜられたのは、今日から言へば、國民理想と云ふものを明かにせられたのてあつて、非常に大事な御書であります。

道善房の遷化と報恩鈔

建治二年、聖人五十五歳になりまして、三月十六日にお師匠様の道善房が遷化せられた。是は台密の僧侶であつたけれども、併し聖人は師匠思ひの方であるから、報恩鈔をお作りになつて、日向、日實の兩人を房州にお遣はしになつて、さうして師匠道善房の墓の前に於て、この報恩鈔を讀ませられました。

報恩鈔の大要

この報恩鈔と云ふ御書は上下二卷ある、最初の書き出しは、狐でも死んでは自分の生れた穴の方へ脚を向けない、又毛實と云ふ人が助けてやつた龜はその恩を報じて、毛實が城から脱れて出る時分に濠の中に澤山の龜を伴れて來て、さうして濠を渡した事がある、畜生でさへさう云ふものであるから、況してや人間に於ては、恩を受けて恩を忘れると云ふことがあつてはならぬ。古の賢人聖人と言はれる人は恩を心得た人の事を言ふのである。是は佛法をやらぬても、人は恩を忘れてはならぬのである、況んや佛法を學ぶ者は父母師匠等の恩を忘るべしやと云つて、四恩を明かにせられた。何の人間でも恩と云ふものは大事にするものである、況してや佛法を奉ずる者は、更に恩誼の觀念を尊んで行かなければならぬ。そこで師匠の恩の事を段々述べられて、最後に至つて、斯う云ふことをお書きになつた。師匠は助かつたとは思ふけれども、どうも怪しい所がある、いろ〳〵日蓮がお勸めしたけれども清澄山の寺を捨て難い、世間の名利の觀念の捨て難いと云ふやうな考の爲に、遂に生涯——心では日蓮の言ふ事を信ぜられたか知らぬけ

れども、どうも表面ははつきりしなかつた、正直に判斷するとどうも彼の儘では立派に成佛なさつたとは認められない、仍つて自分の今まで積んだ法華經の功德、聲を嗄らして法に盡し國に盡したる功德をお廻ししたならば、師匠道善房が必ずお助かりなさるに違ひない。

されば花は根にかへり眞味は土にとどまる。

木に花が咲いてその花が落ちたら、その花は又根の養分としてかへる、日蓮が法華經弘通の花が開いたのも、師匠道善房のお蔭に依つて僧侶になり、法華經弘通の花を開くことが出來たのであるから、花の開いた滋養分は又根の道善房にかへらんければならぬ。

この功德は故道善房の聖靈の御身にあつまるべし。

日蓮が法華經の爲に積んだ功德は、師匠道善房の御身に集まるであらう、之に依つて救はれるであらうと云ふことをお書きになりました。さうして之をその墓前に於て聲高々と讀ませられたのでありまして、如何にも立派に報恩の敎をお遺しになつたのであります。

建治二年の蒙古使

この建治二年九月、又蒙古の使が九人參りましたが、之を復た由井が濱邊に於て斬りました。又この年日蓮聖人の方へは、駿河の熱原甚四郎と云ふ者が信者になりました。是は後に非常な迫害を受けまして、弓の的になつて死にます。法華の信仰を捨てなければ弓を以て射殺すぞと言はれるにも拘らず、之を肯かなかつたので、南無妙法蓮華經を唱へながら、弓を射られて死んだ人であります、日蓮主義の歷史に華を咲かして居る人でありますが、この人がこの年に信者になつて參りました。

熱原甚四郎の歸信

四信五品鈔

一尊四士の開眼

建治三年聖人五十六歲、四月十日に有名な四信五品鈔と云ふ御文章が出來上りました。又四條金吾が一尊四士——釋尊を中心にして四菩薩を兩脇に置いた像を造つて、その像の開眼を求められましたので、日蓮聖人は喜んで之を開眼せられ

龍象房と日心

ました。當時鎌倉に龍象房と云ふ者が來まして、是は淨土宗の坊さんてありますが、洵に惡い坊主で、いろ〳〵法華經に對して惡口をしたり、誤魔化し說敎見たやうな事をやりました。その時日心上人が問答することになりました、四條金吾も行かれましたが、日心はこの時十九歲でありましたが、中々問答は達者な人でありますから段々議論しまして、ギューと云ふ目にやり込めた。その中には色々愉快な問答があります、『お前の言ふやうな事を言つて、世の中の機嫌取り見たやうな事ばかりして居つては、眞の敎と云ふものは分らなや、大勢が斯う考へて居るからサウ言はなければならぬと云ふやうな事では、正義と云ふものは分らない』と日心上人が言はれた。その時に龍象房が『それは口先でお前等さう云うことを言ふけれども、誰でも命は惜しい、誰でもサアと云ふ時になつたならば、やはり私慾の爲に正義を枉げるものであるから、そんな豪そうな事を言ふな』と言つた。その時日心が答へて『それはお前が物を知らぬのだ、乃公は不肖なながら日蓮聖人の弟子だ、我が師日蓮聖人の經歷は斯く斯くの如きものである、是ても正義を捨てゝ慾望の爲には勝手の事を言ふと謂へるか』と云ふので、日蓮聖人が正義の爲に奮鬪せられた歷史を語りました、『我が師日蓮聖人は實は上行菩薩の生れ代りである、日蓮聖人が龍の口にて頸を切られんとせられた時には、この日心は供奉の一人であつた、かくても身命を惜むものと言へるか』と云つて、非常な强い議論をせられましたので、聞いて居る所の者も非常に感心したのであります。その龍象房との問答の事は、後に日蓮聖人が賴基陳狀をお書きになつて、その中にその光景が詳しく出て居ります。

大雪庵室を埋む

十二月に至つて非常な雪が降りまして、身延の庵室が雪の爲に倒れました。今と違つてその頃は、身延の雪が非常に深かつたのでありまして、庵室がすつかり雪の爲に壓せられて倒れました。信者が通ふ事も出來ないので、其處に居る所の弟子等が力を協せて、漸く雪を掻きのけて倒れたのを少し起して、その中で一冬をお

治病鈔の大要

凌ぎになると云ふやうな、中々困難な事があつたのであります。

弘安元年になりまして、聖人五十七歳。この年富木殿の爲に書かれた治病鈔と云ふ有名な御書があります。今中山の法華經寺あたりて妙な狐着きの御祈禱と云ふやうな事をやるけれども、そんな事は無かつた。治病鈔と云ふのは、讀んで御覽になれば分りますが、洵にすゞやかな敎であります。人間の身には四百四病と云ふ病がある、是は世間の醫者が治ほす、心には八萬四千の病がある、是は世間の醫者が治ほすことが出來ない。佛が世に生たのは、肉體の病を治ほす爲に出たのでなくして、「精神の病を治ほす爲めである」。肉體の病は佛樣の時分には耆婆と云ふものがあつて治ほした、精神の病はお釋迦樣が治ほされたのである、今あなたは親戚の人々の病の事で心配して居られるけれども、肉體の病と云ふものは、世間の醫者に掛るが宜しい、精神の病は宗敎に依つて治すが宜し」。併しそれは信心すれば御利益と云ふこともあるから、必ず病氣の爲に良いけれども、併し法華經の有難いのは元品の無明を斷ると云ふ所に在る、元品の無明と云ふ精神の一番闇黑の病に對して、法華經は效能があるのであると云ふことを書いてある。兎に角宗敎は病氣の事を祈ることも宜しいけれども、唯だ病氣を祈つてその效能が有る無いと云ふやうな事が、宗敎だと云ふことになると、非常に宗敎の本領が間違つて來るのでありまして、迷信になつて來るのであります。日蓮聖人は治病鈔には左樣な事は書いて居られぬ、短かい五頁か六頁のものであるから、讀んで御覽になれば分る（遺文錄二〇九八）人間は眼が明いて居るのだから、假名を拾つても聖訓を讀むが宜い。何も面倒な議論などは必要はない、それを讀んで見れば今法華經寺あたりてやつて居る事が、治病鈔に合ふか合はぬか直ぐ分る。この年色々御文章を二十二種もお作りになつて居ります。

淺草寺寂海の歸服

弘安二年、聖人五十八歳。この七月の頃彼の有名な淺草寺の法印寂海と云ふ人が富木殿と隅田川の渡場に於て法論を致しました、マア法論と云ふ程でもありま

せぬが、いろ〳〵話が出ました。所がこの寂海と云ふ人も中々道念堅固なえらい人でありまして、天台宗の僧侶でありますが、段々法門が進んで行つた所が、富木播摩守が段々打込んで行く爲に、寂海が感服した、『あなたは在家の方で何も知らぬ事と思つたら中々法門の事にお精しい、定めし師匠があるだらう』『無論ある』『あなたがその位えらいのだからお師匠さんは餘程えらい者だらう』『それはえらい所ではない、大變なものだ』『何處に居らるる』『甲州身延の山に』『それぢや一緒に行かう』と云ふので、寂海と云ふ人も熱心で、隅田川の渡船場で一緒になつただけで、富木殿と一緒に到頭身延山まで行きました。そこで日蓮聖人に遇つたから堪らない、日蓮聖人の爲にすつかり感化されて、江戸に歸りまして淺草の寺を捨てゝ、法華の寺を開いたのが柴場の長昌寺と云ふ寺であります、現今も大きな寺になつて居ります。この年の十二月に至つて、日法上人が日蓮聖人の御眞影を聖人の御姿に準へて彫刻致しました。

日法師の影像

弘安三年、聖人御歳五十九歳。この年にも亦いろ〳〵書物をお書きになりました。日本の國としてはこの頃から蒙古の襲來と云ふことが段々迫つて參りました。北條時宗は戰の準備に相當な警戒を致しました。

弘安外寇の警備

弘安四年、聖人六十歳の時、四月、三大祕法鈔をお書きになりました。是は前に申しました『王法佛法に冥し佛法王法に合し』と云ふ、即ち宗教が國家と調和をして、國家の爲に盡して行くことを說かれた有名な御文章であります。

三大祕法鈔

この年茲に愈〻蒙古來と云ふものが起つて參るのであります、この光景は少し詳しく申上げたいと思ひましたけれども、極大體に止めて置きます、蒙古の方も前の文永十一年の時の失敗に懲りて居りますから、今度は更に大仕掛に隊を整へてやつて參りました。總大將が彼の有名な阿剌罕と云ふ蒙古人でありました、所が途中で病氣になりまして、阿塔海と云ふ者が之に代りました。さうして總隊が東路軍と江南軍の二つに分れて、東路軍は蒙古勢と高麗の兵を合せまして、蒙古

弘安四年の蒙古來の軍容

勢の司令官が忻都、高麗勢の司令官が洪茶丘、又一方の高麗軍の將が金方慶、この三人が東路軍の大將であります、この軍勢總計四萬貳千人、大小併せて九百艘と云ふ船に分乘して、朝鮮の方から來るのであります。江南軍と云ふのは、支那の南部を征服してその方から兵隊を繰出して來たのでありまして、その數は非常に多いのであります、その司令官は范文虎でありまして、兵數凡そ十萬有餘、蠻軍十萬と古來稱して居りますが、十萬より少し多かつたのであります、船は三千五百艘、それに兵粮を備へること四十萬石、一方東路軍の兵粮が十二萬三千石、即ち合計しますと凡そ十五萬人の兵隊を率ゐて、五十二萬石の兵粮を用意して、日本を攻め取つてしまはうと云ふのであります。文永の役の時には總計二萬九千七百人であつたのでありますが、今度はその約五倍の多數を以てやつて來た、さうして一方すつかり日本の事情は探偵をして居りますし、今度はそれこそ一擊の下にやつてしまはうと云つて、すつかり計畫して來たのでありますから、それは全く神風が吹かなければ、日本はやられてしまつたかも知れぬのであります。

戰況の概要

東路軍は壹岐で江南軍と一緒になる豫定でありましたが、どう云ふものでありますか、この江南軍の方の出發が手遲れになりまして、大變日が遲れたのであります。東路軍の方は既に先着を致しまして戰を開始しましたが、その時には日本の方でも石壘と云ふものを海岸に築いて準備をして居りまして、砲臺を設けたやうなもので、敵も中々能く攻めましたが、どうしても上陸が出來ない、そこで博多灣の入口に突出して居る半島の比志島と云ふ所に上陸しました。その時は日本軍も一生懸命でありまして、こつちから夜襲をしたりした、三艘位な小さな船でもつて敵陣へ飛込んで斬捲つたりしまして、隨分敵を弱らした。敵は江南軍が今にも來るか〳〵と思つて指折り數へて待つて居つたが、二ケ月と云ふもの影も形も見えない、二ケ月目にモウ待ち疲びれて居る所へ漸く江南軍がやつて來て、鷹島と云ふ所に着きました、それが弘安四年の七月三十日であります。所が翌閏七

月朔日の夜の引明けに非常な暴風が吹いた、漸く三十日の晩に鷹島に着いて、ヤレヤレと云つて居る時に大風が吹起つて、船は大破壞に陷るのであります。併しこの時古來三人しか生き殘らなかつたと云ひますけれども、そんなものではない、大將などは一人も死んで居らぬのであります。東路軍の方に於て生きて還つた者一萬九千三百九十七名、それから江南軍の方で生殘つた者が凡そ二割、全軍の八割は死んだのでありますから、十萬人の中八萬人死んで二萬人ほど生きて居つた。兩方合せますれば三萬九千餘人生殘つた譯でありまして、船も相當殘つて居つたのであります。所がそれに向つて日本軍は又襲撃をした、それば中々日本の武士も能く働いたので、殘軍に向つて攻撃を加へました、そこで敵は、是は大變、兎に角マゴ〳〵して居つたら大變だと云ふので、逃げて還つてしまつたのでありますが、實に日本に取つては空前絶後の危急存亡の秋であつた。

小蒙古御書の訓誡

日蓮聖人はこの事を非常に御心配をして居られましたが、愈〻蒙古がやつて來た時に、聖人が弟子信者中に送つた御文章があります、即ち弘安四年六月十六日『小蒙古御書』と云ふものを書いて門人共を誡められた。日蓮聖人は早くから、文應元年安國論捧呈の時分からこの事は言うて居る、それが事實になつたのであるから、それ見たことかと言はんならぬ時であるけれども、日蓮聖人はそれを言はさない。もと〳〵國家を思ふが爲に、日蓮は安國論を書いたのであつて、どうぞ國家が眼醒めて反省すれば宜いと思つたけれども、事今日に至つては何も蒙古などが攻めて來ても『小蒙古の人大日本に寄せ來るの事』と云つた、小蒙古などは日本の爲に直にやられてしまうと云ふやうな勢でお書きになつた。さうして日蓮の豫言の的中したことを誇り顔に、日蓮の弟子が國家の恩惠を忘れて、日蓮聖人がえらい、日蓮聖人がえらいと言つて、國を呪ひ、國を嘲けるやうな事は一言でも吐いてはならぬ、この日本を思ふの精神の爲にやつたのであるから、日蓮の身體員をするが爲に、國家に禍ひするやうな言語は一言も吐くことはならぬと云

つて誡められた、此處が大事である。日蓮主義が下手にやると、日蓮聖人ばかり有難くなつてしまつて、日蓮主義の大事にしなければならぬ國家と云ふものが憎いやうになる、日蓮聖人は斯う言つたのに、何時までも譯の分らぬ念佛などを許して居るから駄目だと言つて、國家を呪ふやうになる、それは間違つて居る。日蓮聖人のお考と云ふものは、如何にしてもこの國家を救ひたいと云ふ、即ち國を思ふの精神、人を愛するの精神が根本であるから、この小蒙古御書に誡められた事を忘れてはならぬのであります。この年又色々の著述があります。

聖人池上へ移る

弘安五年聖人六十一歳。この年秋に至つて聖人少し御病氣が出まして、池上の方に行つて臨終をすると云ふことになつて、九月二十三日池上に於て大曼荼羅をお書きになつて、池上右衞門の大夫宗仲に之をお與へなりました。さうして九月二十五日、宗仲がその邸を寺として開堂式を營まれる時に、日蓮聖人は高座に上つて立正安國論をお講じになつたのであります。是は大事なことでありまして、

本門寺の開堂と安國論の講述

公衆を相手の最後の說法であつて、是は弘安五年九月二十五日であります。その時立正安國論を取つて之を講ぜられて、徹頭徹尾、終始一貫して、正法を立つて國家を安らかにする、即ち安國論の精神、

國亡び人滅せば佛を誰が崇むべき、法を誰か信ずべき哉。先づ國家を祈りて須く佛法を立つべきなり。

と云ふことを、この時も御講釋なさつたのであります。是は深く記憶すべき事であります。

六老僧の選定

翌十月八日に至りまして、六老僧を選定せられまして、『日蓮亡き後はこの六人を見ること日蓮の如くせよ、その代に六老僧に選ばれたる者は、日蓮の通り折伏の精神を以て、手弱き精神ではいかぬから、法の爲に命を捨てゝも正義を守ると云ふ決心を以てやれよ』と云ふことを遺囑せられました。その六人は第一が日昭第二が日朗、第三が日興、第四が日向、第五が日頂、第六が日持であります。こ

の六老僧を選んだのは、どうだ斯うだと云ふ議論がありますけれども、之をお選びになつたのは、確かな傳にどれでも出て居る事でありますから、近頃歴史研究などで色々言つて居りますけれども、私は六老僧をお選びになつた事は信じて居る一人であります。それから同月十一日に至つて、前さに申しました經一麿に對して、帝都の弘通を付囑せられました。

經一への付囑

最後の遺誡

それから十二日、愈〻御涅槃になる前日になりまして、弟子信者が集つた時に最後の説法を病床に於て爲さつたのでありますが、之を「最後の嚴訓」と稱して居りますが、その最後の嚴訓と云ふのはどう云ふ事を言はれたかと云ふと、大體斯う云ふ事を御説法なさつたのであります。日蓮は顧みれば法華經の神力品に於て上行菩薩として法華經の付囑を受けた、今日になつて見ればお前達も日蓮が唯の人間ではない、上行の再誕であつたと云ふことを信ずるであらう、この上行の再誕たる日蓮は、釋尊の付囑に應へて、いろ〳〵法難にも値つたけれども、幸に法を傷けずして今日に至つた。勸持品の二十行の偈も不束ながら之を身に讀むことが出來た、さうして釋尊の御委託に背かぬやうに法華經の正義を立てることが出來たのは、身に餘る所の光榮である、是で以て臨終しても釋尊にお目に懸つて確に復命を申上げる材料があるから、日蓮は悦び身に餘つて居る次第である、又汝等は日蓮の教化を受けて、今まで既に信心決定して居ることであるから、今更言ふ事もないが、併し法華經の有難い事を茲に一言するならば、法華經は信念成佛の教である。眞の信仰を打立てさへしたならば、如何なる善根功德も皆その信仰の中から生じて來るのが法華經の教であるから、汝の父母が如何に惡人であつても、お前の親爺は提婆達多ほどの惡人ではあるまい、お前の母親が如何に愚痴なりと雖も、龍女ほどな愚痴ではないだらう、然らば提婆達多龍女ですら成佛の出來る法華經であるから、汝の父母は必ず法華經に依つて皆救はれる者である、であるから親を思ふ孝心の上からも法華經を信ぜよ、汝等皆その望を滿足せしむ

ることが出來るから。併し法華經々々〳〵と云つても壽量品を忘れては、すべて駄目だ、壽量品の教義に徹底しない法華經ではすべて駄目だから、其處を忘れぬやうにせよ、と仰しやつたのが一番終りの御言葉であります。

聖人入滅の光景

斯くして說教が終つてお經が始りまして、方便品が濟んで多勢の弟子信者が皆聲を合せて壽量品を拜讀して居りました。さうして長行が濟んでお自我偈に移つて『得入無上道、速成就佛身』と云ふ所になつて、一座の者が日蓮聖人の御樣子を見ると云ふと、何時の間にか既に御入滅になつて居つた、即ち壽量品讀誦の間に日蓮聖人は御涅槃なさつたと云ふのであります、それは十月十三日の朝辰の刻と云ふのでありますから、丁度朝の八時頃であります。それでありますから今日でも池上の御會式には、十二日の晩から行つて一晩徹夜をして、さうして十三日の朝八時の御勤を終つて來ると云ふ型が遺つて居るのであります。

御墓所の輪番

越えて十六日、聖人の御遺骨を寶瓶に盛り、二十一日に身延山の方へ之をお送りすることになつて、弟子信者が大勢附添うて參りまして、二十五日身延山へ安着をなさつた。それから門弟輪番を定めて日蓮聖人のお墓を守ることになつて、今日に至るまで身延山に御眞骨として遺つて居ります。深草の元政上人がこの御眞骨を拜して、

何故に　くだきし骨の　名殘ぞと
思へば袖に　玉ぞちりける

と詠みましたのは有名なことであります。

聖人の行動に學べ

日蓮聖人が一代六十年の間一切衆生を救ふが爲に、又日本の國家を救ふが爲に晝となく夜となく正義の爲に奮鬪をせられ、この偉大なる活動を繼續せられましたその德を賞歎し奉れば、洵に申し樣もない宏大無邊な事であります。吾々は未だ日蓮聖人の御精神、又日蓮聖人の偉大なる御德を、十分に味ふ事は出來ないので、唯だ自分が多年いろ〳〵研究しました結果、その一部分を申上げたのであり

ますが、どうぞ諸君は更に進んで日蓮聖人の人格及び教義を研鑽せられまして、自分自らもそれに依つて導かれ、尙ほ廣くは國家社會の爲に、この尊い教が廣宣流布して、日本並に一閻浮提一同に、日蓮聖人を仰いで以て精神の師匠とするやうに、ありたいと希望するのであります。

王法佛法の冥合

王法佛法に冥し、佛法王法に合して、王臣一同に本門の三大祕密の法を持ちて、有德王、覺德比丘の其の乃往を、末法濁惡の未來に移さん時、敕宣並に御敎書を申し下して、靈山淨土に似たらん最勝の地を尋ねて、戒壇を建立すべき者歟、時を待つべき耳。

（三大祕法鈔）

廣布の大願

譬へばよき火打と、よき石のかどと、よきほくそと、此の三つ寄り合ひて火を用ゆる也。祈りも又是の如し。よき師とよき檀那とよき法と、此の三つ寄り合ひて祈りを成就し、國土の大難をも拂ふべき者也。よき師とは、指した る世間の失無くして、聊かの諂ふことなく、少欲知足にして慈悲有らん僧の、經文に任せて法華經を讀み持ちて、人をも勸めて持たせん僧をば、佛は一切の僧の中に吉第一の法師也と讃められたり。吉檀那とは、貴人にもよらず賤人をもにくまず上にもよらず下をもいやしまず、一切人をば用ゐずして、一切經の中に法華經を持たん人をば、一切の人の中に吉人也と、佛は說き給へり。吉法とは、此の法華經を最爲第一の法と說かれたり、已說の經の中にも今說の經の中にも當說の經の中にも、此經第一と見えて候へば吉法也。

（初心成佛鈔）

日蓮聖人正傳　終

大正七年七月　日印刷
大正七年七月　日發行

【日蓮聖人正傳】奥付
正價壹圓六拾錢

不許複製

著者　本多日生

發行者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　大橋新太郎

印刷者　東京市神田區表猿楽町三丁目一番地　島連太郎

印刷所　東京市神田區表猿楽町三丁目一番地　三秀舍

發行所　東京市日本橋區本町　振替東京二百四十番　博文館

東京帝國大學文科大學教授
文學博士 姉崎正治君著

法華經の行者日蓮

圓滿の人格、血涙の一生、熱火の信仰、深遠の理想、描き來つて史詩あり、紀傳あり、哲學あり、宗教あり、懺悔の告白と救世の使命と、憂國の警策と感應の法樂と、奮戰の叫びと信仰の凱歌と參差照應の壯觀古今に冠絶す。

忠實に上人の遺文に基き、佛教史、宗教學、宗教心理の通義に照らして「法華經行者」の一生を活現す。是れ二十世紀の新法華經也著者研鑽十五年、「法華經行者」を世界に公表すると同時に之を日本の公衆に薦む。

大判總布函入紙數六百餘頁
筆蹟(コロタイプ)(寫眞版)十五枚
肯像寫眞版大判地圖各一葉

正價二圓五十錢
送料內地—十二錢

解說要本 法華經の行者日蓮

『法華經の行者日蓮』の〔廣本〕は批評研究的、今度の〔要本〕は解說的に要を摘むで、佛教の術語を一々近代語に直し、又脚註で解說したもの。〔廣本〕以後の新研究や、以外の材料を加へて、而かも容易に通讀し得る樣、〔廣本〕の四分一で『法華經行者』の經歷、思想、信仰、努力、血と涙との跡を傳へたのが、この一篇。

三六判總布天金緣函入美本
日蓮上人眞蹟六葉挿入
正價金八拾五錢 郵稅六錢

博文館發行

法華經講義

全二冊
菊判洋裝特製函入美本
紙數各壹千餘頁
上卷—下卷—各二圓三十錢
郵稅各冊十二錢

東鄕元帥 文學博士 大僧正 三宅雪嶺君 外朝野諸名士題字 序文

本多日生猊下著

本書は佛教史三千年間に現れたる法華經に關する各種の思想は悉く之を參照し正法華經ケルン譯等を對照して法華の全文を詳細に解說し他面には法華經を基準として現代に要求する宗教の要義を批判し又我邦の文學史を考察して此經に關する詩歌を列擧し更に經中の要處には日蓮聖人の遺訓を引證し又科段は綿密なる圖表を附せり、序說には佛教全般に關する要義を擧げて之を解說し。釋文には釋題、大意、文々解釋の三段に分ち。文々解釋の下には科段。通解。妙解。異解。批判。質義。解決。參考。讃唱の項目を立てゝ極めて懇切に之を說明せり。法華經が世界最第一の寶典たるは世既に定論あり苟くも思想の源泉を掬んで正明なる信解を得んとするものは何人も研究し讃仰すべき唯一の寶典なり。

東京 博文館發行 本町

本多日生師著

國民道德と日蓮主義

三五判洋裝函入
紙數四百八十頁
正價九拾五錢
郵稅六錢

日本國體と日蓮主義

海軍中將
佐藤鐵太郎君述

我萬邦無比なる國體の尊嚴を闡説し磬くして國民の自覺を叫び根本的に忠君愛國を唱へ併せて英傑日蓮上人の人格と教義の峻絶を鑽仰賞揚して思想の選擇と修養を奬むるものは本書也。尊嚴の國體と秀絶の教法との相抱冥合の説述は論義整然字句熱烈にして一讀正氣靈動の概を生ぜしむ。國家、社會、教育、婦人の諸問題及び神儒佛、外來思想に對する批判、並に歐洲戰亂に對する感想、青年に對する訓誡、海外發展策等滔々數萬言辯じ明さゞるはなし。

三六判洋裝上製函入
紙數四百二十餘頁
正價壹圓廿錢 郵税八錢

修養と日蓮主義

本多日生
下狸
著

本書目次

第一編日蓮主義の主張
第二編社會問題と日蓮主義
第三編修養と日蓮主義
第四編日蓮聖人と女性
第五編日蓮主義より見たる大涅槃經
第六編日蓮聖人の信仰
第七編日蓮主義の使命
第八編日蓮主義の體道用具

三五判函入五百六十頁
正價九拾五錢 郵税六錢

東京本町
博文館

日蓮主義

大僧正 本多日生師著

三五判上製函入
紙數六百五十頁
正價九拾五錢 郵税六錢

本書講ずる所、無慮十有五萬言、第一篇には宗教の必要と其の選擇を論じ、第二篇には、我國思想史の正統を論じ、第三篇には國民道德と宗教信仰の關係を明し、第四篇には破佛論の主張を擧げて之を粉碎し、第五篇には各種の佛教觀を辯じて其實歸を證し、第六篇には釋迦牟尼の芳躅を尋ねて清新なる信仰の泉を掬み、第七篇には佛教信仰の體系を論じて其の源流と分派と統歸とを辯じ、第八第九第十の三篇には一切經の神髓たる壽量品の全文を講述し、第十一篇には日蓮主義に對する各種の觀察と眞意義を講明せり、又信仰者の爲に修法の次第と法華經の要品を揭げ更に本經祖書の要文を拔粹して信念の警策に供せり本書は最も堅實なる根據に立つて時代の要求を參酌せる日蓮主義紹介の絶好良書なり。

姉崎博士
山川智應君
共著

高山樗牛と日蓮上人

中判洋裝總クロース上製
口繪數葉紙數四六四頁
正價壹圓五十錢 郵税八錢

樗牛が一生は日蓮上人の渴仰を以て終れり。上人が上行再現の自覺は、樗牛をして久遠の靈光に接せしめたり、最後の一年間に於ける樗牛氏の信仰と熱血とを集め、加ふるに況後錄の註解と、日蓮上人及び樗牛の信仰に關する編者の論評を加ふ、一部日蓮主義の好指鍼にして、又實に樗牛が眞信の告白集なり。

博文館發行

新時代の宗教

東京帝國大學文科大學教授
文學博士 姉崎正治先生著

『大戰の爆發で世界は大震蕩し、人心は根柢からゆるぎ出した、地大いに動いて、新な泉の湧くべき時、大破壞に續いて大建設の起るべき氣運は、肅々として近きつゝある、人性の本然を回復し、之を文明爛熟の火坑から救ひ出し、而して人間らしい生活の新世界に人生の醇化を貫徹するは、人類今後の任務』此の任務に當るべき宗教如何。是れ本書が世の覺醒を要求する問題也。

四六判洋裝上製函入
紙數四百六十頁
正價壹圓貳拾錢
送料八錢

東京 博文館 本町

根本佛教

八宗九宗多岐の佛教とその根本を尋ぬれば、佛陀釋尊の大悟に發しその人格に基く、嚴密なる歴史研究に依りて、この根本佛教を闡明し、且つ其枝葉花實の依つて出づる所以を指示したるもの、即ち本書也。佛陀の一生如來の人格、世相、觀察分析、涅槃の理想、般若の空觀、法華實相觀、往生の宗教、道行の標準曾伽の團結、布教、端緒等この一冊に盡せり。

菊判洋裝紙數四百七十頁 正價金貳圓
參照引用文並索引添付 送料十二錢

宗教と教育

文學博士 姉崎正治君著

附篇
- 日本宗教の概觀
- 西洋文明の由來
- 三教會同の觀察

宗教の實際問題も學術研究も宗教學を經て初めて其方針を決するを得べし
本編はカント、ヘーゲル、シエリングの宗教哲學を統合し批評し、吠檀多の無宇宙論佛教の涅槃論を精査して東西宗教の粹を蒐め古今哲學の結果に依りて宗教哲學の一大系統を組織したるものなり以て指南とせば理論に實際に鞏固なる基本を得ん。

個人と社會、國家と人道、現實と理想、諸方面より宗教と教育との問題を論究したるものは本書也。信仰の闡明、人生の哲理、現代社會の評論として教化の大事を考ふる人の熱讀を要請す。

中判洋裝紙數六百二十頁
正價金八拾錢
郵稅八錢

東京 博文館 本町

ハルトマン宗教哲學

菊判洋裝紙數四百頁
並製……六十錢 實稅八錢
上製……七十五錢 實稅十錢

大僧正 本多日生師撰述

大藏經要義

文學博士 井上哲次郎先生叙
海軍中將 佐藤鐵太郎閣下序
文學博士 姉崎正治先生論文

菊判洋裝上製函入美本
三方金每卷四百頁以上
正價各壹圓八拾錢 送料各十二錢

本書は大藏經中重要なる經典約壹千餘卷を撰出して其の組織と綱要とを簡明平易に講述し且要文を訓譯して詳解を附し、醇乎たる宗教的の妙旨、周到なる道德的の教義深遠なる哲學的の眞理、微妙なる人生訓を闡明し來つて一般人をして浩瀚なる一切經の要義を公正に會得せしめんとする空前の大著也。大藏經は佛教各宗の源流にて復是東洋文明の最高權威たるは論なき所、今や新文明の創建に進むに當り歴史的思想の傳統を諦觀するの必要に迫れるの時この大著に接す。心ある國人は擧つて本書の出現を歡迎すべきなり。（大正六年）

□隔月發行 ═══ 自第一巻
□全十八巻 ═══ 至第八巻 既刊

東京 本町 博文館

325
298

終